

山梨県都留市小形山

中條迷跡

都留市発掘調査報告書

都留市教育委員会

1974・3



中溝遺跡出土土偶 (实物大)

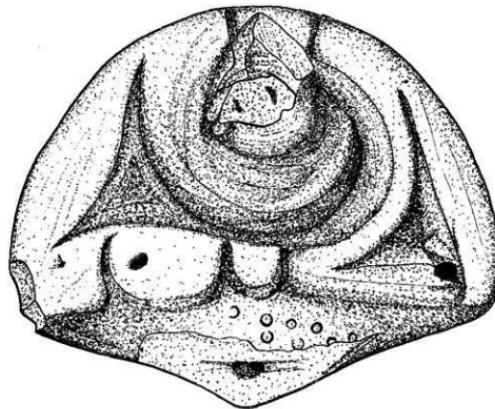
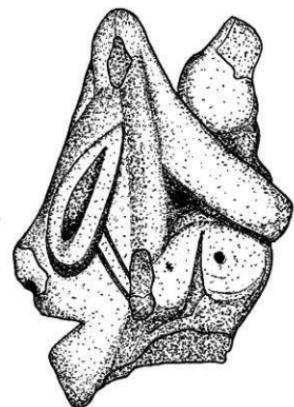




土偶裏面



土偶側面



土偶実測図（实物大）

中溝遺跡 6号住居跡付近
より出土した土偶について

当土偶は、中溝遺跡 6号住居跡発見の契機となったもので、土偶が出土したと思われる付近に鉢状が存在した。顔面の最大横幅×縦幅が 11.7×9.5 cm の大きなもので、後頭部には、トグロを巻いた蛇がカマ首を持ち上げている。色調は茶褐色を呈し、黒光りのする熟成良好なものである。なお、後頭部の首のあたりに存在する竹管文様は、山梨県東八代郡御坂町上黒駒・中丸遺跡出土土偶の首部から背・肩の部分に及ぶ竹管文様を思わせる。

解説 美 譲 行
実測図 竹内 清志
写真 里村 光一

序

私たちの祖先が歩んだ生活のあとを調べその文化遺産を大切に保護し、後世に伝えることはわれわれの責任であり、使命であります。

近年文化財に対する一般の関心が高まっているなかで、市では積極的に文化財保護行政にとりくんでおり、関係者のご協力によって着々と成果をおさめていますことは、まことにご同慶にたえません。

昭和46年7月に住吉遺跡の発掘調査、昭和47年には住吉遺跡住居の復元、そして小形山谷遺跡発掘調査と次々に調査が進められ、今回の中溝遺跡発掘調査を実施したのであります。

この調査は、市が昭和46年度から3ヶ年計画で、36.4haに及ぶ小形山、大原台地を開発しようと整地工事を進めております際、側溝工事中土器類が発見され、予備調査を行なったところ遺跡を確認したので昭和48年3月、調査会を発足し調査団長に日本考古学協会員山本寿々雄氏を委嘱、都留文科大学考古学研究会諸君の応援を得て発掘調査したものであります。

発掘された遺跡、遺物は、縄文時代中期という土器のもっとも華やかな時代に創られたもので、大自然の中で強く生きぬいた人間の生活と文化の証しであり、これらに接するとき、まことに感慨ふかいものがあります。

この貴重な調査記録をここに作製し、その成果をまとめ本書を刊行した訳でありますが、この報告書がひろく関係者に活用され古代史解明の一助となり、文化財保護に役たつことを念じております。

おわりに本書刊行までに寄せられた関係各位のひとたならぬご努力ご協力に対し、深甚なる敬意と感謝の意を表します。

昭和49年3月

都留市教育委員会

発掘調査によせて

昭和46年度から3ヶ年計画で小形山大原台地36.4haを開発するため、1億5千万余円を投じて着工した大原地区工業導入関連基盤整備事業は、着々と進行台地は広々と整備された耕地に一変、その完成を急いでおります。

今回の中溝遺跡調査は、この中心地帯の測溝工事中、土器片の発見により、急拠関係者の協力を得て行なわれたものであります。

住吉・中谷の遺跡調査につづいて、今回の発掘調査となつたのであります、幸いにして山本寿々雄先生をはじめ、都留文科大学の優秀な考古学研究会の皆さんのご支援のおかげで、次々と大きな成果をおさめることができ、都留市先史時代の研究、埋蔵文化財の保護のため、まことによろこばしい次第であります。

数千年もの長い間地中に埋もれていた住居や土器類の貴重な当時の生活のあとが確認されたのであります、これら祖先の残された文化遺産に接し、深い感動を覚える次第であります。

この報告書がひろく関係者に活用され、縄文文化を知る手がかりになるとともに、本市文化財保護に役立つことをねがってやみません。

この大きな成果をおさめられました関係者各位のご努力とご協力に対し、厚く感謝を申しあげます。

昭和49年3月

都留市長 富山 節三

目 次

序

発掘調査によせて

例 言	1
第1章 遺跡の位置および調査の経過	27
第1節 遺跡の位置と調査経過	27
第2節 発掘調査日誌	29
第2章 調査の概要	33
第1節 層 序	33
第2節 遺 構	33
第3章 出土遺物	45
第1節 土 器	45
第2節 土製品	66
第3節 石製品	72
総 括	
縦年の位置づけと中溝パターンについて	80
付 錄	
中谷遺跡の研究	85

例　　言

1. この調査は、小形山中溝地区の耕地整理事業作業中に発見された遺跡を、
中溝遺跡調査団が、発掘調査したものである。

2. 当報告書の図版作成担当は次のとおりである。

写真撮影 里村晃一

遺構 里村晃一

土器 竹内清志・里村晃一

土製品 田村正和

石製品 河合良彦・竹内清志・田村正和

土器復元 奥 隆行

拓影 都留文科大学考古学研究会

中溝遺跡調査会規約

第1章 総 則

(目的)

第1条 この調査会は、小形山中溝地区内における埋蔵文化財包蔵地の土地造成前の調査を施行し、その記録を作成すると共に保存活用方法を研究することを目的とする。

(名 称)

第2条 調査会の名称は、中溝遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

(事 業)

第3条 調査会は、第1条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 埋蔵遺跡の予備調査、本調査による記録作成および保存活用方法の研究
2. その他前項の目的を達するために必要な事業

(事務局)

第4条 調査会の事務局は、都留市上谷270番地、都留市教育委員会内に置く。

第2章 組織

第5条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

顧問 1名 名誉会長 1名 会長 1名 副会長 3名

理事若干名

（顧問、名誉会長、会長、副会長）

第6条

1. 顧問は、都留市長の職にあるものをもってあてる。
2. 名誉会長は、都留市教育委員会教育委員長をもってあてる。
3. 会長は、都留市教育委員会教育委員長の職にあるものをもってあてる。
4. 会長は、調査会の業務を総括し、調査会を代表する。

5. 副会長は、都留市文化財審議会会长および調査団顧問並びに調査団長をもってあてる。

6. 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

(理事)

第7条 理事は、市内文化財保護関係者および調査団のうちから会長が委嘱する。

(役員の任期)

第8条 役員の任期は、調査会解散までとする。ただしその職ある故をもって委嘱された者の任期は、当該職の在職期間とする。

(事務局長)

第9条 調査会に事務局長をおく。

事務局長は上司の命を受け、調査会の事務を処理し、事務局員を指揮、監督する。

(事務局員)

第10条 調査会に事務局員をおく。

1. 事務局員は、会長が委嘱する。

2. 事務局員は、上司の命をうけ、調査会の事務に従事する。

(調査団)

第11条 調査会に予備調査、本調査、その他の事業を専門的に実施するため、学識経験者から成る調査団をおく。

(調査団顧問、調査団長、副団長)

第12条 調査団に調査顧問、調査団長、及び副団長をおく。

1. 調査団顧問、調査団長は、学識経験者のうちから会長が委嘱する。

2. 調査団長は、会長の命をうけ、調査団の業務を総括し、調査員を指揮、監督する。

3. 副団長は、団長が依頼し、団長事故あるときは、その職務を代行する。

(調査員)

第13条 調査団に調査員をおく。

1. 調査員は、会長が委嘱する。
2. 調査員は、上司の命をうけ、調査団の業務に従事する。

第3章 役員会

第14条 役員会は、顧問、名誉会長、会長、副会長、及び理事で構成する。

2. 役員会は、本規約に定めるものの他、調査会の事務管理及び執行に関する基本的な事項を決定する。

(招集)

第15条 役員会は、必要な都度会長が招集する。

2. 役員の3分の1以上から会議の目的である事項を示して役員会開催の請求があった時は、会長は役員会を招集しなければならない。

(会議の運営)

第16条 役員会は在任の役員の3分の1以上が出席しなければ開催できない。

2. 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、あるいは、他の役員を代理人として表決を委任した投員は出席とみなす。
3. 会長は役員会の議長となる。
4. 役員会の議事は、特に定める場合を除き、出席役員の過半数の賛成により決定する。

第4章 事務の管理、執行

(事務の管理、執行の基準)

第17条 調査会の事務の管理及び執行に当っては、本規約並びに役員会で決定する基準にしたがって行なうものとする。

第5章 規約の変更、解散

(規約の変更)

第18条 規約の変更は役員会の議決によるものとする。

(解散)

第19条 調査会は、第3条の事業の完遂後、解散する。

付則

本規約は、昭和48年2月13日から施行する。

中溝遺跡発掘調査要項

1. 発掘予定地の所在及び地番

山梨県都留市小形山121番地・122番地

2. 発掘予定地の面積

発掘面積 864m²

3. 発掘予定地に係る遺跡の種類及び名称並びに現状

中溝遺跡（縄文時代中期遺物散布地）

小形山台地に立地した遺跡であり、現状は畑で工業導入関連農業基盤整備事業大原地区圃場整備事業工事のため整地を行なう予定である。

4. 発掘調査の目的

縄文中期遺跡の存在がうかがわれ、本年度工業導入関連農業基盤整備事業大原地区圃場整備事業工事のため整地を行うため事前にその全貌をあきらかにし、その記録を残して縄文中期文化の実態をあきらかにするため、この調査を行なう。

5. 発掘調査の主体となる者の氏名及び住所

住所 山梨県都留市上谷270番地

団体名 都留市教育委員会 教育長 定月金太郎

6. 発掘担当者の氏名及び住所並びに経歴

住所 山梨県甲府市岩窪町6-4

氏名 山本寿々雄 日本考古学协会会员

7. 調査の方法

中溝遺跡調査会において方針等を決定し、調査会内の調査団（都留文科大学考古学研究会）に委託して発掘調査を行なう。

8. 発掘着手の時期

昭和48年2月13日

9. 発掘終了の予定期

昭和48年2月28日

10. 出土品の処理に関する希望

出土品は調査結果の整理後、都留市教育委員会事務室に保管し公開展示する。

中溝遺跡調査会名簿

顧問	都留市長	富山	三
名誉会長	都留市教育委員会教育委員長	杉	章郎
会長	都留市教育委員会教育長	田	節
副会長	都留市文化財審議会会长	定	金太郎
"	都留市文科大学教授	月	富士男
"	中溝遺跡調査団長	羽	博雄
理事	都留市助役	篠	男則
"	都留市教育委員会教育委員	山	正郎
"	"	舟	慮彦
"	"	久保	重義
"	都留市文化財審議会委員	木	利嘉
"	"	高	通榮
"	"	高	市次
"	"	小	智匡
"	"	河	長恭
"	"	遠渡	次郎
"	"	内	藤
"	"	兼奥	辺
"	"	中	藤
"	"	杉	松
"	産業課長	石	隆
調査団顧問	都留文科大学教授	篠	光太郎
調査団長	日本考古学协会会员	山	明章
調査団員	都留文科大学考古学研究会員	山	博雄
"	"	竹里	則志一
"	"	河	彦江
"	"	田	清晃
"	"	小	良文
"	"	泉	淳恵
"	"	服	弘三
事務局長	都留市教育委員会教育課長	大	安義
事務局次長	" 課長補佐	棚	三郎
事務局員	" 社会教育第一係長	山	男典

事務局員 都留市教育委員会事務職員

タ
ダ
タ

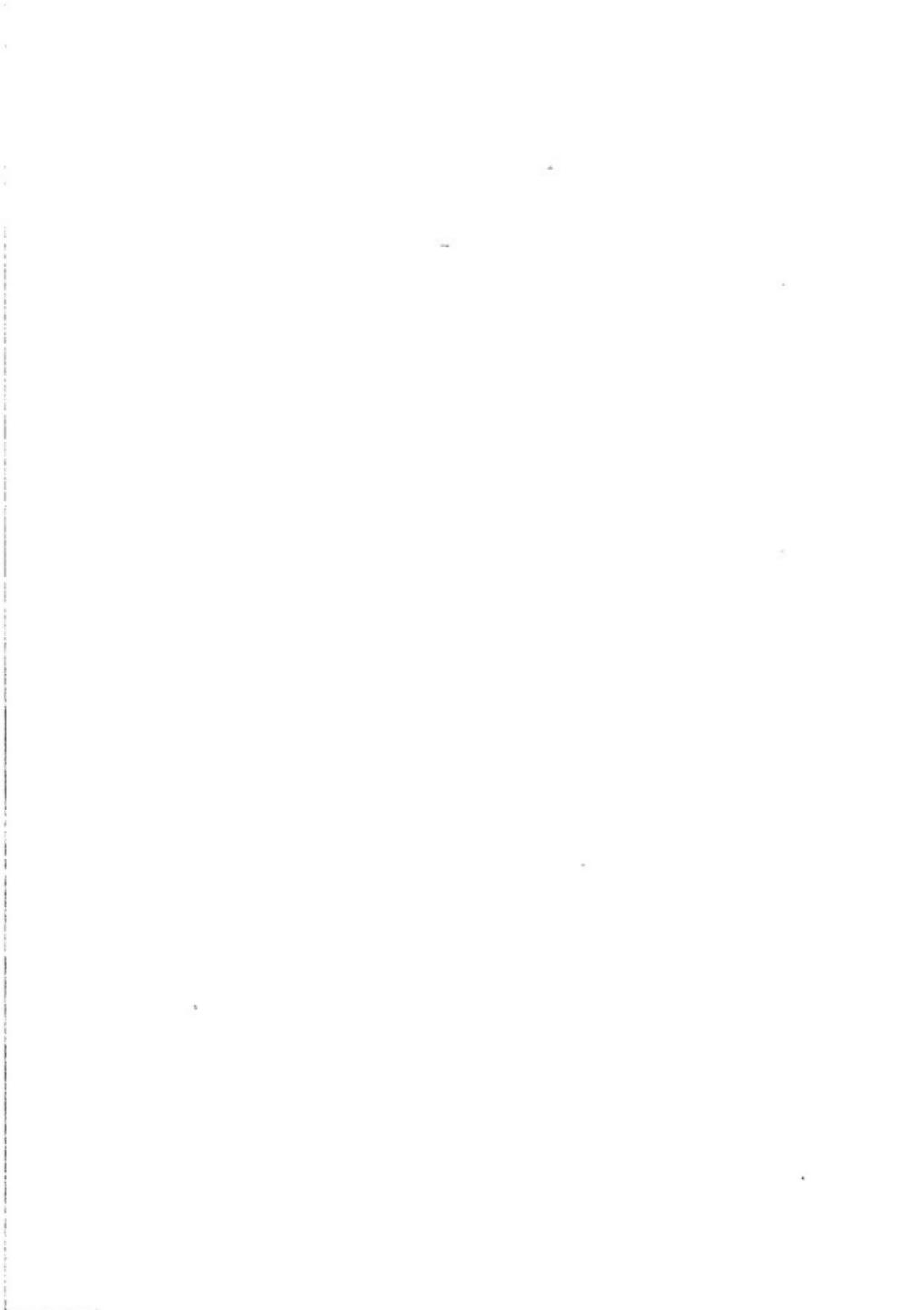
石村修
安富知子
古屋泰弘
杉本貴美雄

都留文科大学考古学研究会

山本正則 竹内清志 里村晃一
河合良彦 田村正和 田中文江
泉恵子 小野淳子 岩城孝志
伊藤さち子

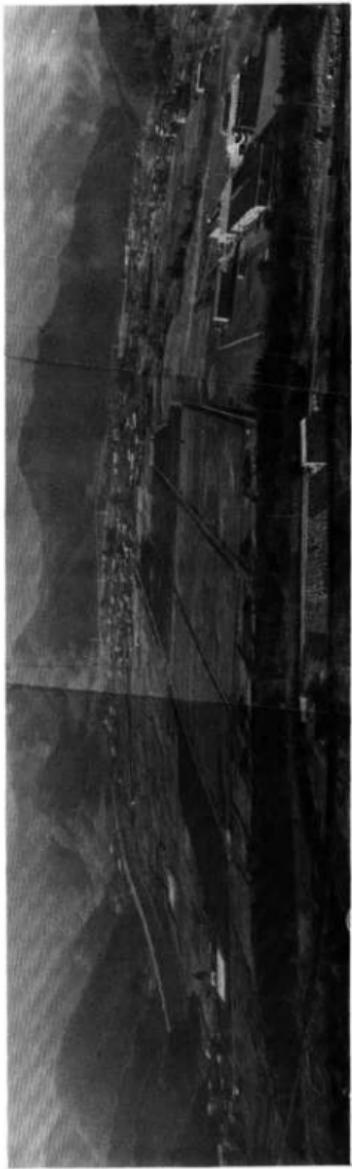
発掘協力者

山下理達 都留市青年団協議会
重森直久 酒井和夫
小林安典 稲原正江
天野正夫 佐藤貴久子
大原ほ場整備事業促進委員会 渡辺絹代
佐藤喜美江
相馬範久



工事中の大原台地

大原ほ場整備事業施工前の大原台地





中 溝 遠 遊 景

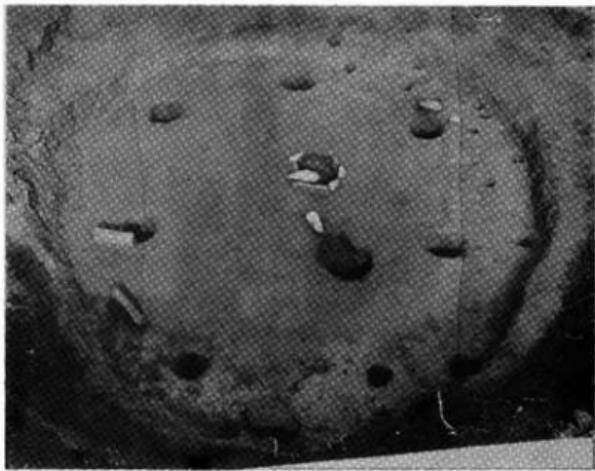


景全樓一進

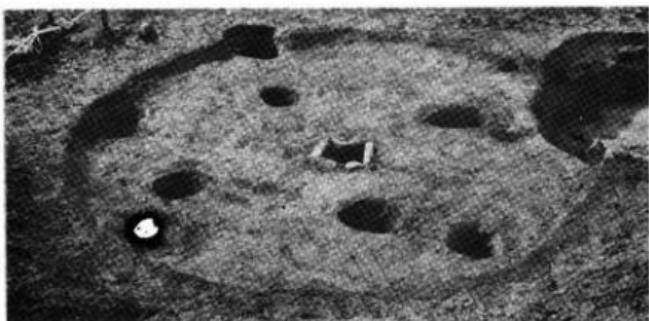




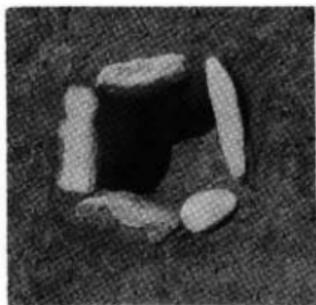
1号住居址



2号住居址



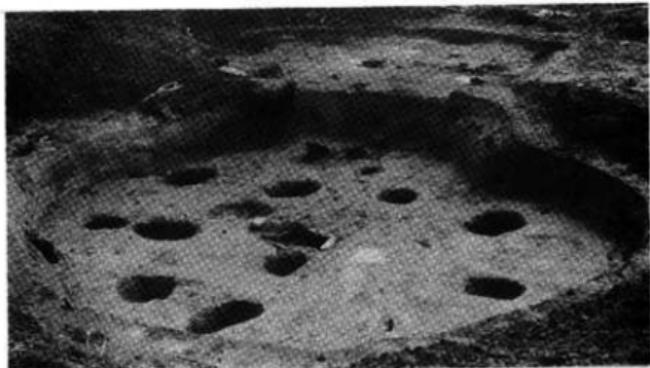
3号住居址



3号住居址 石囲い炉



4号住居址 石囲い炉



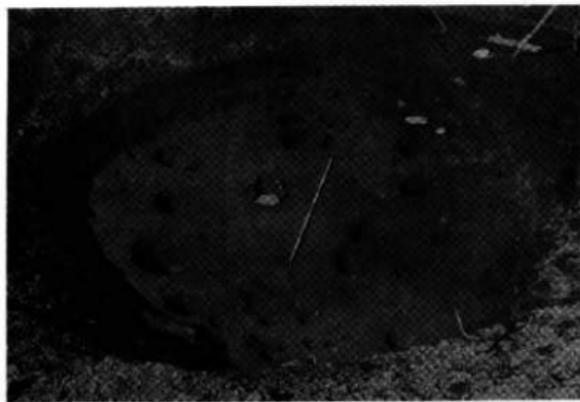
4号住居址



2号住居址石圓い炉



5号住居址石圓い炉



5号住居址



1



2



3



4

1号住居址出土土器



6

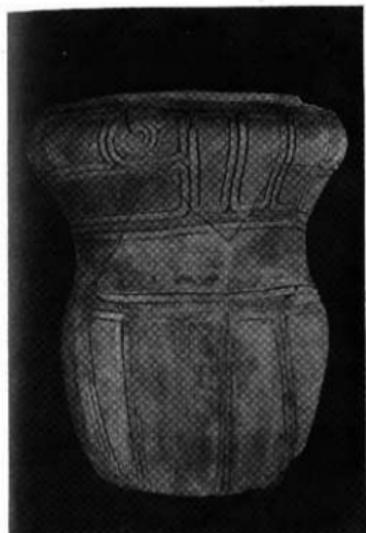


7

1号住居址出土土器



8



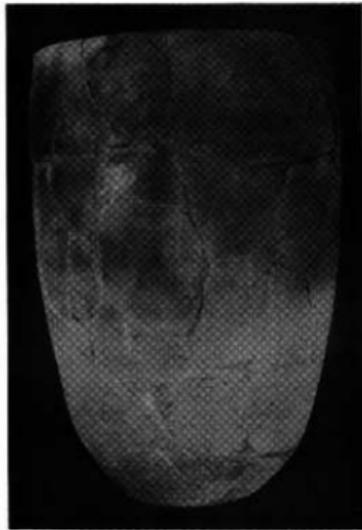
9



10



11

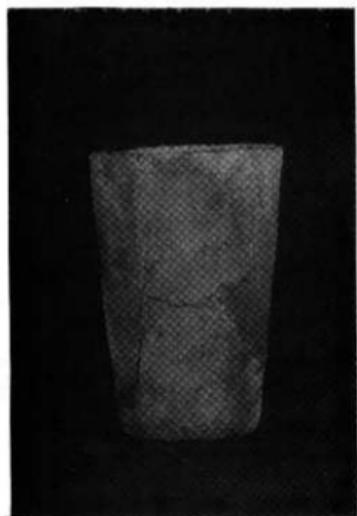


12

1号住居址出土土器



1 3



1 4

1号住居址出土土器



1 7



1 8

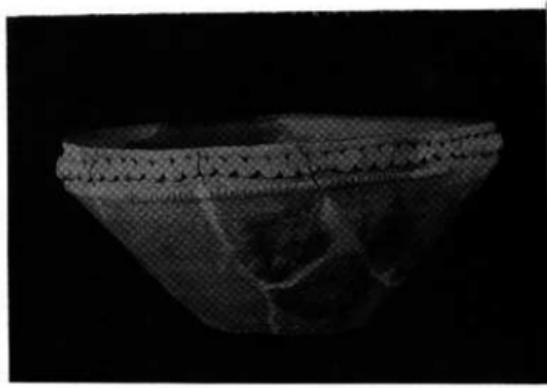
2号住居址出土土器



19



15



20

2号住居址出土土器



22 4号住居址出土土器



28 住居址外出土土器



23 5号住居址出土土器



29

住居址外出土土器



30



打製石斧



打製石斧



打製石斧



石匙 磨製石斧



打製石斧



磨 石



1号住居址出土土偶



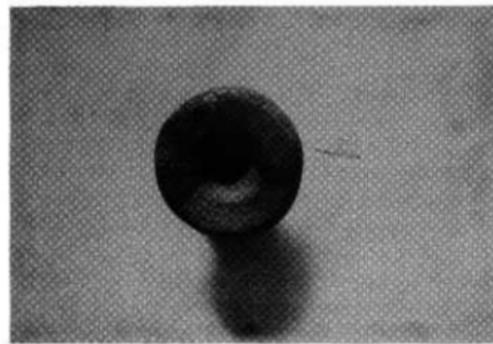
1号住居址出土土偶



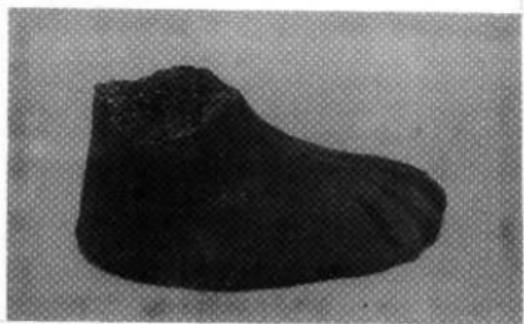
土偶 (表)



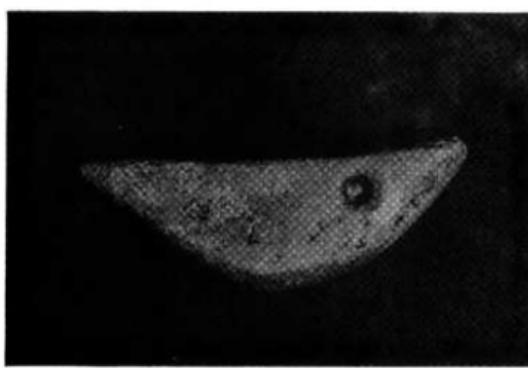
土偶 (裏)



-25- 耳栓



† 土偶



第1章 遺跡の位置と調査の経過

第 1 節 遺跡の位置と調査経過

都留市中溝遺跡は、山梨県都留市小形山地区を流れる桂川の左岸河岸段丘上の位置するいわゆる小形山大原台地のほぼ中心地点に位置している。

大原台地は東西約600m、南北約700m南北に開けた台地で、南方および東方を桂川が蛇行し断崖を形成し、北方は高川が小さな渓谷を作つて西から北に流れおり、西方は山裾となって、その山裾を南北に中央高速自動車道が走つてゐる。富士急行線禾生駅から北に約1km、田野倉駅から南に約1km、両駅のほぼ中間に位置している。

標高390m、段々の桑園および水田となつてゐた地域で、西方の山あいに富士山頂を仰ぐことが出来る。

高川をはさんで台地の北方には権現原（中野原）、堀の内、松葉の遺物散布地昭和47年発掘の縄文時代後、晚期の中谷遺跡を控え集落の想定される地域であるので、従来からも注目して調査を継続していた地域であったが、堆積土の厚いためか僅かに中溝の城之内菊造氏の桑園から土器片若干および原部落から土器細片、石錐、黒曜石片若干が採取されたのみであった。

従つて県の遺跡台帳にも未登録の地域である。

昭和47年県立都留技能専門学校建設のため台地の東南角が整地された際も、数次の調査にもかゝわらず僅かに石棒1個を採取したのみであった。その石棒もブルトーザーによって掘り起こされた土中より発見されたものを工事現場の人達によつて採取されたもので、出土状況も、出土地点も層位の変化も明らかでない。

昭和47年秋「農村地域工業導入実施計画」に基づき、大原一円が整地されることとなつたので、あらゆる機会を利用して調査を継続、工事現場の人達にも異状を発見したら直ちに教育委員会に連絡するよう指導して來たが、僅かに土器片数個の発見届があつたのみで昭和47年もまさに暮れようとしていた12月29日、側溝削工事現場から、大形の土器片が多量に出土するとの連絡を受けたので早速調査したところ、100cm以上の地下から多量の土器片および打製石斧を採取し住居址1軒を確認した。

整地された附近一帯からも土器片の散乱が見られたので集落址の確信を得ました。工事終了後は水田となり遺跡の破壊されることが確認されたので、2月7日から2月25日まで19日間にわたり都留文科大学考古学研究会および都留市青協の諸君の応援を得て発掘調査を行ない、新たに住居址4軒を発掘し他に1軒を確認した。

調査終了後、ほどなく附近は区画された水田及び畠となり、地形は一変し発掘地点を知る事も困難な状態であるので、こゝにその正確な位置を記録すると下記のとおりである。

北緯 $35^{\circ}36'$ 東経 $138^{\circ}56'$ が遺跡の中心位置であり、現在、城之内菊造・平井 秀雄・堀内 猛・清水 武子・平井 亀吉・佐藤 知徳・佐藤 伊作・平井 長生・佐藤 正胤氏の水田となっている地域である。

中溝遺跡は縄文時代中期前半に位置する単純遺跡で、都留市先史時代の空白を埋める発見として、その意義は極めて重大である。

すなわち昭和46年発掘の「住吉遺跡」は、中期末の遺跡であり、47年発掘の「中谷遺跡」は、後期および晩期の遺跡である。

縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期の5期中、中期、後期、晩期の遺跡を各1個づつではあるが発掘し得たことは都留市先史時代研究のためまことに喜ばしいことである。

(奥 隆行)

第 2 節 発掘調査日誌

昭和48年2月7日 晴

午前9時30分より作業を開始する。整地作業による遺物の散布状態から、東西10m×南北2mのトレンチを設定し、ただちに発掘にとりかかる。出土遺物としては、磨石と多量の打製石斧があり、土器片も多量に出土した。

2月8日 晴

午前9時30分より作業を開始する。午前中に住居址の立上がりを発見し、先の工事中発見された住居址を1号住居址と命名したことにより、この住居を2号住居址とした。そして、この2号住居址の概観を知るため、先に設定したトレンチと直交するトレンチを設定した。また、ボーリング調査によって、ローム面の落込みが、付近に2~3発見されたため、全面的な発掘を目的とした、1辺4m×6mのグリッドを設定し、ただちに発掘にかかる。出土遺物としては、発見された2号住居址上部より、浅鉢が出土し、グリッドより石匙、玉(破片)、打製石斧などが、それぞれ1個づつ出土した。

2月9日 晴

午前9時30分より作業を開始する。2号住居址内の発掘は後まわしにして、昨日設定したグリッドを掘り進み、遺構の発見に努めたが遺構は発見出来なかった。出土遺物としては、打製石斧1個と多量の土器片があげられる。

2月10日 晴

午前9時30分より作業を開始する。発見された2号住居址の北側に住居址が見つかったので、3号住居址と命名する。3号住居址は、整地面よりわずか、70cmしかないし、北側の立上がりがこわされているため、相当の遺物が散失しているものと思われる。出土遺物としては、多少の土器片があげられる。

2月11日 晴

午前9時30分より作業を開始する。2号住居址内の発掘にとりかかり、復元可能と思われる浅鉢と深鉢が1個づつ、また大型の土器片2個が、それぞれ

発見された。2号住居址内の土器片の出土はおびただしい。

2月12日 晴

午前9時30分より作業を開始する。昨日に続いて、2号住居址内の発掘を進める。出土遺物としては、顔面把手（破片）、土偶（頭部）、石皿（破片）、雨だれ石、打製石斧（多量）、磨製石斧などがそれぞれ出土した。また、復元可能と思われる土器が、2個体出土した。

2月13日 晴

午前9時30分より作業を開始する。2号住居址を完掘。床面は、中央の炉址を中心にして、まわりから落込んでいるような形である。住居址の北側と東側の立上がり付近の床は、しっかりしているが、南側と西側は、やや、やわらかく、黒色土を固めて構築されている。午後より、3号住居址の発掘にかかり、3号住居址を切って構築されている新しい遺構を発見。これを4号住居址と命名し、ただちに大きさの確認に移る。4号住居址の上部から土偶（足部）を発見。その他の出土遺物としては、完掘された2号住居址より磨石、打製石斧、土器（復元可能）、顔面把手が、それぞれ1個出土した。

2月14日 晴

午前9時30分より作業を開始する。昨日完掘された2号住居址の平板測量と写真撮影を行なう。

2月15日 晴

午前9時30分より作業を開始する。昨日に続き、遺跡の遠景写真等の撮影を行ない、住居址の平板測量を行なう。

2月16日 晴

午前9時30分より作業を開始する。全員で4号住居址の発掘を行ない、床面を確認し、柱穴の発見に努めた。2個の柱穴の底に、溶岩質の岩石が存在した。出土遺物としては、半月形をした玉1個と、大量の土器片があげられる。

2月17日 晴

午前9時30分より作業を開始する。4号住居址内のセクションベルトを除いて、4号住居址を完掘し終わる。土器片の出土は多量であるが、小破片が多い。また、4号住居址の炉付近より、焼土や灰に混じって炭化物の小片が発見された。

2月18日 晴

午前9時30分より作業を開始する。3号住居址のセクション図をとり、ベルトをはずした後、完掘し終わる。住居址の北側の立上がり付近を中心で破壊されているため、柱穴の発見に多大の困難を極めた。3号住居址より磨製石斧1個出土。

2月19日 雨

雨のため発掘中止

2月20日 雨

雨のため発掘中止

2月21日 曇

午前9時30分より作業を開始する。2号、3号、4号のそれぞれの住居址の平板測量を行なう。

2月22日 晴

午前9時30分より作業を開始する。平板測量終了後、出土した住居址のセクション図や測量図による住居址の検討を行ない、2号住居址の黒色土とローム混じり部分の床面を一段落とすことに決定した。

2月23日 晴

午前9時30分より作業を開始する。セクション（2号住居址の炉を通すようにして）を残して、ローム混じりの黒色土を掘り下げる。下層より炉が出土したので、ローム混じりの黒色土層が貼り床であることを、確認し、出土した

住居址を5号住居と命名する。炉址周辺より多少の土器と炉の中に埋めてあった土器以外に出土遺物なし、ローム面まで掘り下げ、床面を確認し、柱穴の発見に努める。

2月24日 晴

午前9時30分より作業を開始する。5号住居址を完掘し終わり、平板測量、写真撮影に行なう。

2月25日 晴

午前10時より後かたづけを行ない、本日で発掘を終了する。（竹内清志）

第 2 章 調査の概要

第 1 節 層序

都留市小形山中溝遺跡は、桂川に向って緩かに傾斜している（ローム面は地表より傾斜が急である）小形山台地に位置し、耕地整理の際発見されたものである。発掘が行なわれるまでに表土がある程度均されており、それ故原地形が多少変形されていたが、発見された住居址は、すべてローム層を掘り込んで構築されていた。

層位は、ローム層まで表土・黒色土・褐色土の3層からなっており、黒色土及び褐色土中には、層位にはなっていないが火山砂砾（スコリア）が含まれていた。

1号住居址は、耕地整理中発見されたため層位的には不明確である。2号住居址は、一部攪乱されていたが、黒褐色土・褐色土の2層による住居廃棄後の自然堆積が見られた。黒褐色・褐色は、火山砂砾（スコリア）の多少による違いと思われる。3号住居址は、耕地整理面（地表）から浅すぎたために不明確である。4号住居址も2号住居址と同様に、粘土状の暗黒色土・褐色土・黄褐色土・黄褐色土十ロームの4層による住居廃棄後の自然堆積が見られた。5号住居址は、2号住居址に拡張されたと思われ、貼り床であるローム十黒色土とその下の黒色土の2層に分けられる。6号住居址は耕地整理作業中に発見されたため詳しい層位は不明であるが、床面に赤褐色の火山砂砾（スコリア）が散在していた。（河合良彦）

第 2 節 遺構

今回の調査により発見された遺構は、すべて住居址で、その数は6基である。住居址は、すべてロームを掘った堅穴であり発見順に1号・2号・3号・4号・5号・6号としたが、2号と5号また3号と4号が互いに重複している。これらの遺構は、台地のほぼ中央部に北東—南西方向に並んで位置している。

1号住居址

直径6m弱の円形プランの住居址であると思われるが、側溝工事中の発見

であり、道路敷にかかっていたため、約半分を発掘したにとどまった。側壁は、北側の部分に20cmの深さで存在したが、他の部分は、工事中に既に破壊されていた。床は、ロームを硬く踏み固められてほぼ平坦であり、周辺部に周溝は検出されなかった。ピットは5個検出され、P1・P2・P5は、深さが1mを越えるものあり、主柱穴と考えられる。また、P3・P4は小型で浅いものである。炉は、プランのほぼ中央部に位置し、北と東側だけに石があり、他の位置ではなく、四角形を呈し、上部には多量の焼土の堆積がみられた。遺物の出土状況は、床面より50cm前後の層を中心とし、北側はプランの外部にまで及んだ模様であるが、詳細は不明である。その量は、今回発見された住居址中では群を抜くものであった。

2号住居址

長径5.4mのほぼ円形のプランの住居址である。壁は、深さ40cm前後であり、西側の一部は、耕作により破壊されている。壁の東側半分は、傾斜が急でほぼ直立しているが、西側は、東側に比べ傾斜はゆるやかである。床は北・東・南の周辺部がロームで、中央部と西の周辺部がロームと黒色土の混じった貼り床であり、その下に5号住居址が存在する。床のロームの部分は硬く踏み固められて平坦であるが、貼り床部は比較的軟らかく中央部の炉の周辺は、多少窪んでいる。ピットは、大きなものが8個、小さなものが11個それぞれ検出された。大きなものP1～P8のうちP8は柱穴とは考えられず、貯蔵用のものと思われ、中より若干の土器片が出土した。P1～P7は主柱穴で、直径40cm、深さ80cm前後である。また他の小ピットは、東側半分すなわち床のロームの部分のみに検出されたが、西側の貼り床の部分にも同様に存在したものと思われるが、検出することはできなかった。これらの小ピットは、直径10cm深さ10～20cmで、多くは壁のそばに存在し、斜めに掘られたものもある。炉は多少北寄りではあるが、ほぼ中央に位置すると言ってよいであろう。形は五角形で北側の石はないが、炉の上に浮いた石が、それにあたるかも知れない。また、周辺部にも中にも焼土は全く検出されなかった。主柱穴の配置から、南側のP4・P5の間に入口が設けられたと思われ、S3は溶岩であり、上下の面は多少平坦に加工されているようで、入口と何らかの関係をもつのではないかと思われる。またS1・S2は全面が加工され、直方体を呈し、S2は3号住居址の炉石の1つと接合する。S1・S2は両方とも石質が同じであり、1

つの石より作られたもので、石柱として住居址内に立っていたのではないかと思われる。さらに、S 3 の東側の壁近くの床面より、土偶の頭部が、顔を壁に向けて出土している。遺物の出土状況は、土器 1 セットが床面より 20 cm 前後浮いて出土し、床面からも若干の土器片が出土している。5 号住居を埋めて 2 号住居新築後の拡張の痕跡は認められない。

3 号住居址

直径 4 m 弱の円形プランの住居址であると思われるが、床面近くまで整地作業による搅乱があり、壁は南側半分に 10 cm ほどの深さで存在し、北側には認められない。また、西側の一部は、4 号住居址の構築により切られるなど全貌は明らかでない。床は平坦で硬いが、北側の一部に真赤な火山礫が検出され、図面の点線で示した範囲まで床面は確認されている。ピットは全部で 8 個検出されたが、南側の壁を切って作られたピットを除いて大きなものは無く、中央部に炉を開んで、ほぼ四角形に配置された 4 個は、深さ 40 cm 前後ではあるが、主柱穴と思われる。炉はほぼ中央部に位置し、五角形を呈し、南東部の石は 2 号住居址の S 2 と接合する。また、焼土は全く検出されなかった。遺物の出土状況は、床面付近よりの若干の土器片と石斧の出土にとどまった。

4 号住居址

南側にくびれた部分を有する不整形のプランの住居址で、最も長い東西方向は 5.6 m 、最も短いくびれ部を有する南北方向は 4.4 m であり、東側の一部が 3 号住居址を切っている。また、壁は 50 cm の深さを有するが、西側の一部は、旧側溝により若干削られている。全体的に直立した面ではなく、西側の傾斜は、かなりゆるいようである。また中ほどに 3 号住居址の床面で検出された火山礫が 5 cm ほどの層を形成している。床は平坦で硬く踏み固められているが、西側は若干軟弱なようである。ピットは大きなものが 10 個、小さなものが 9 個、浅い窪みが 1 個存在した。大きなピットは P 10 を除いて深さ 80 cm 前後で、P 1 · P 2 · P 3 · P 4 · P 8 は斜めに掘られている。P 1 ~ P 10 は柱穴であるならば、主柱穴であると思われ、1 住居址にしては多すぎるようである。また P 11 は深さ 10 cm ほどで、炉の石が抜き取られたものと思われる。小ピットは、2 号住居址同様壁のそばに点々と存在するが、東側半分のみに限られている。炉は中央より若干西に寄った位置にあり、五角形で北側は小型の石で囲っている。焼土は周辺部に若干認められたが、中からは検出されなかった。

この住居址は、おそらく西側に拡張がおこなわれたであろうと思われる。遺物の出土状況中、特に注目したいものに、床面より40cm前後に玉、土偶の足部が発見されていることである。その下からも土器片が出土したが、完形品は存在しなかった。

5号住居址

2号住居址の貼り床下より発見された長径4.4m、短径4mのほぼ円形のプランの住居址である。南側の一部に張り出し部を有するこの部分は、入口が設けられていたと思われる。壁は、西側を除いて2号住居址建築時に削られ、25cm前後である。また西側の壁は2号住居址と共通であるが、旧側溝により上部は破壊されている。床は比較的軟らかく、若干の凹凸が存在する。ピットは、大きなものが、2号住居址のものを除いて7個、共通のものが1個と小さなもののが24個検出された。P3は共通であるが、5号住居址の床面に達してからは広くなり、貯蔵用のものと思われる。また他の主柱穴について、西側は壁より離れているが、東側は壁の付近や壁を切って掘られたものがある。小ピットは壁の付近に点々と存在し、東側の一部のみ検出されなかった。炉は、ほぼ中央部に位置し、五角形であり、焼土は上部に若干堆積していた。そして中から土器の胸部のみの埋甕炉が発見されたが、焼土はほとんどなかった。2号住居址の炉との位置関係は、5号住居址の炉が西に寄って、一辺を接するように並んでいる。出土遺物は、埋甕炉と若干の土器片のみであった。

6号住居址

工事中に四角形の石畳炉が発見され、土器片がかなり出土したが、詳細については不明である。

A地点

調査前に多量の土器が出土したが、遺構は確認できなかったようである。

B地点

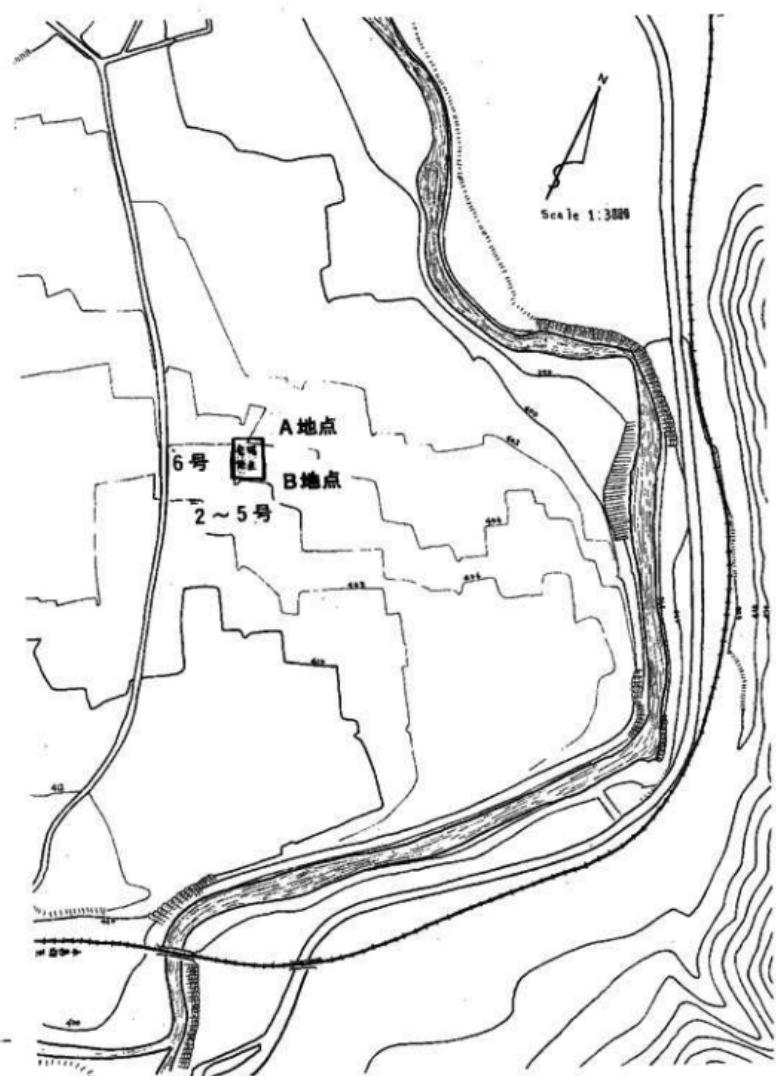
工事中に数個の完形土器が直立して発見されたとの報告をうけ、調査団が調査したところ、2mほどの円形堅穴が発見された。また壁は、30cm前後の深さを有し、床は火山疊であったが、遺物は全く検出できなかった。工事中発見の土器は、この堅穴よりはるかに土層より出土したことであるが、この堅穴との関連は不明である。

以上、各遺構について述べたが、2～5号住居址を中心に、共通する点、注

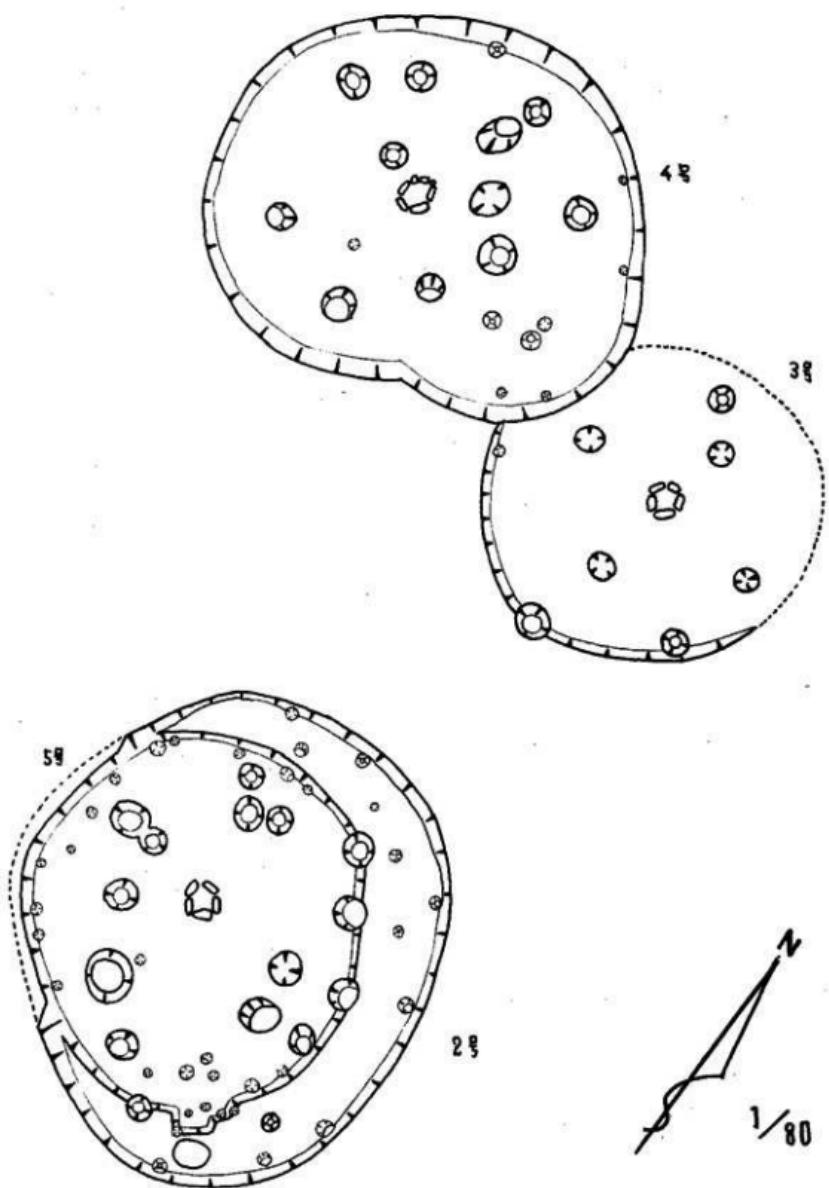
目すべき点として次のようなものがある。

- 壁高がかなりある 2・4・5号
- 周囲がない 1・2・3・4・5号
- 壁のそばに小ピットが存在する
2・4・5号
- 炉が五角形を呈する
2・3・4・5号

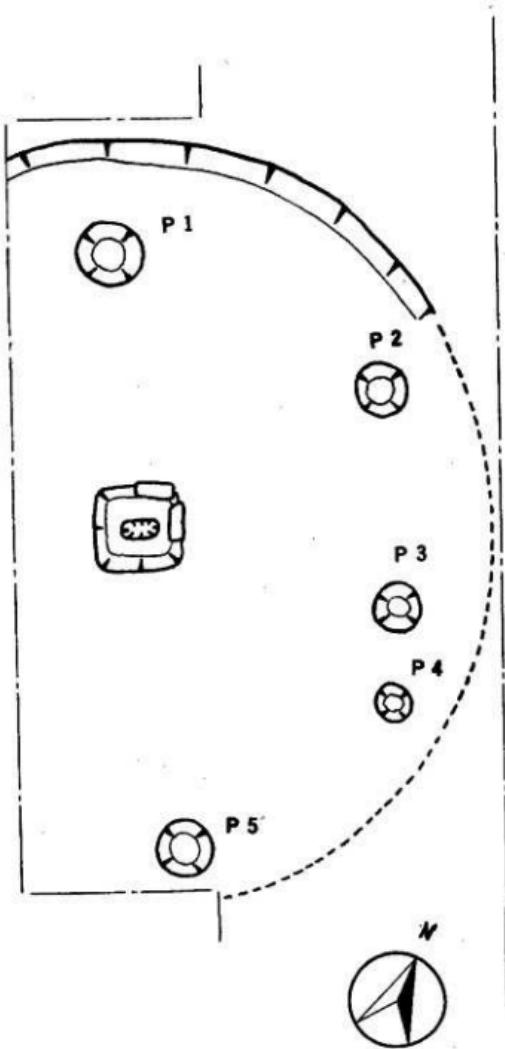
(里村晃一)



第1図 遺跡地形図

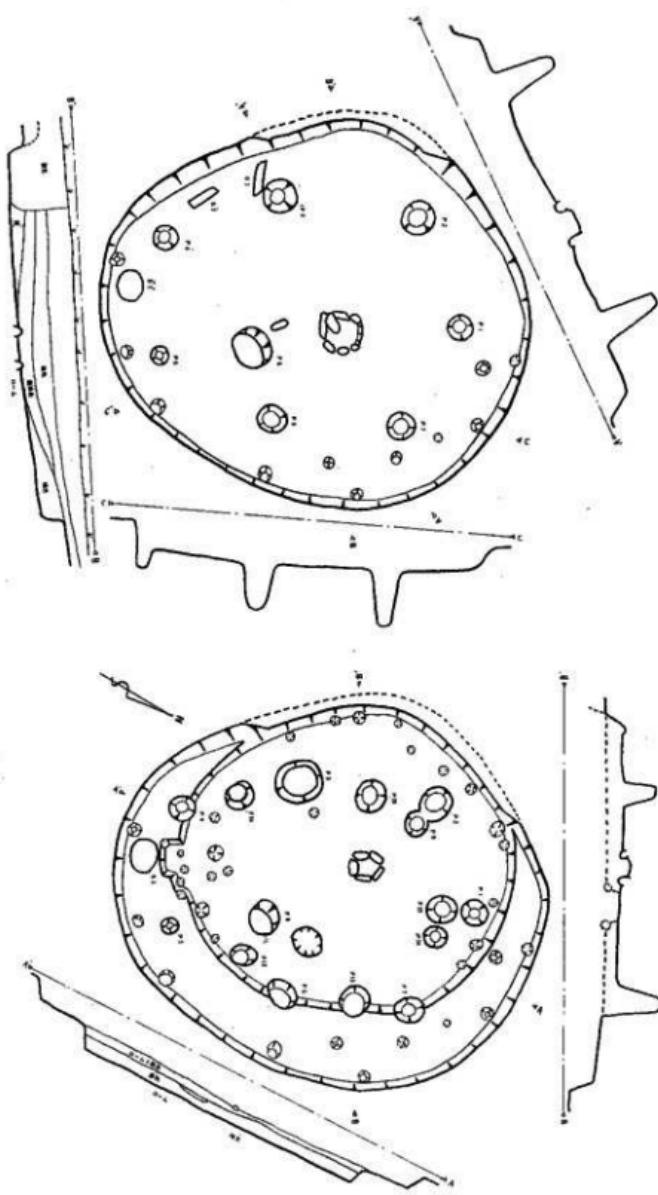


第2図

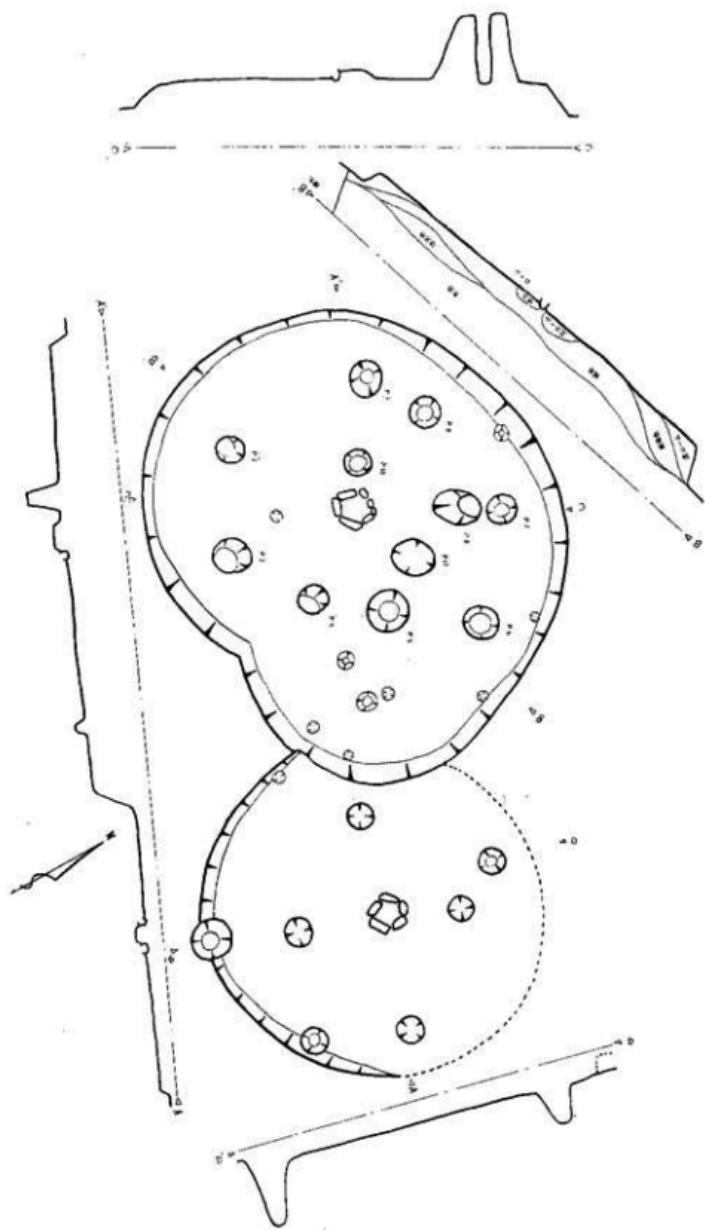


1号 1/40

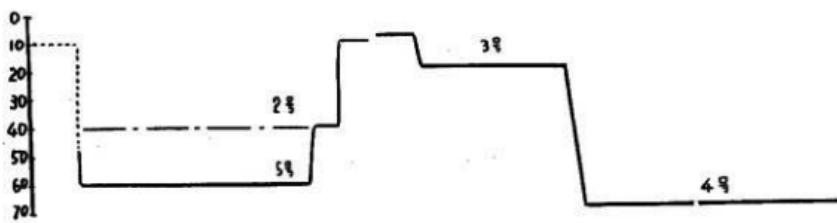
第3図 1号住居址



第4図 2号・5号住居址 1 / 40



第5図 3号・4号住居址 1 / 40



第6図 住居址レベル模式図

第3章 出土遺物

第1節 土器

1号住居址（第7,8,9 図-1～14）

復元可能な土器として深鉢形土器10個、小型無文筒形土器2個、浅鉢形土器1個があり、その外に多数の土器片が出土し、廃棄した住居址に土器を投込んだいわゆる“吹上げパターン”としてとらえることができよう。発見した土器は、次の4つに分類できる。

第一類土器（第7図-1～6）

連続爪形刺突文、連続平形刺突文によって浮き出された隆線により、複合三角形文等の横帯区画文が構成され、又波状沈線が施された土器を一括し、1を除き外は焼成が普通であり、赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多量に含まれている。

1. 無文の口縁が朝顔状に開いた深鉢形土器で、口唇部には3個づつ組になって3ヶ所の押し引きがあり、胴部は一面に連続爪形刺突文により浮き出された隆線が、三角形と平行四辺形を書き、横帯区画文を構成し、その内側には連続爪形刺突文及び波状沈線を施している。

2. 筒形に近い土器で、連続平形刺突文により浮き出した隆線によって、胴部は複合三角形、口縁部は半円形と台形の複合文により横帯区画文が構成され、又下部には逆「L」字状の隆線があり抽象的な感じがする。

3. 弱い「L」字形をした口縁で、口唇に4つの捻り把手を持つ深鉢形土器で、口縁部には焼成後一对の穴を穿っている。文様は、連続爪形刺突文により浮き出した隆線により半円形と三角形と平行四辺形が複合した文様を構成している。波状沈線は上部の一本が沈線で、外は連続爪形刺突文により施されている。

4. 筒形に近い土器で、口縁部に二条の太い沈線により三本の隆線を浮き出し、胴部は連続爪形刺突文により浮き出した隆線により長惰円形の連続文を二条と横位の隆線を構成している。下部は単節斜繩文が施されている。口縁直下には、一对の穴が穿たれている。

5. 大型破片からの復元図である。口縁が外に開いた深鉢形土器で、口縁と

底部付近は無文で、胴部には横位に連続爪形刺突文及び連続山形刺突文を施し、隆線及び波状沈線を描いている。

6. 底部を欠く浅鉢形土器で、口縁部分に一条の押圧された隆線があり、その上には波状沈線をはさんで二条の連続山形刺突文が施されている。

第二類土器（第8図-7～10）

隆線により、縦体区画文が描かれている土器群で、焼成は良好であり、黄褐色～赤褐色を呈するものが多い。

7. 蛇身把手を持つ筒形の土器で、蛇身把手はトグロを巻き、かま首を持ち上げている感じである。胴部の主体文様は、隆線により区画文を行ない、その内側には隆線及び沈線が施されている。隆線によっては連続爪形刺突文等が施され蛇身を表わしている。区画文が発展した土器と考えられる。

8. 「く」字形に屈曲し、波状の口縁部を持ち、底部を欠く深鉢形土器で、隆線及び半裁竹管による平行沈線によって直線又は渦巻きの隆線を浮き出した感じを持たせ、縦体区画文を描いている。隆線によっては連続爪形刺突文が施されている。区画された内側には地文として、ヘラ状工具による沈線が全面に施されている。

9. 「く」字形をした口縁を持ち、胴部がくびれ、底部を欠く深鉢形土器で、8と同様に半裁竹管による平行沈線により、区画が行なわれ、横位に連続爪形文が三本施され、これを境に地文が上部から平行沈線、無文、単節斜繩文の順に施されている。横帶区画文の影響が残っていると考えられる。

10. 深鉢形土器であり、口縁部は無文で、胴部に隆線を貼り付けた上に二条の連続刺突文を、その両側には平行沈線が一条から二条、その片方の外に連続刺突文が、それぞれ施され、蛇身を表わしていると思える。

第三類土器（第9図-11）

11. 「く」字形をした口縁を持つ深鉢形糖器で、全面に単節斜繩文が施され、一対の穴が穿たれている。焼成は良好で、茶褐色を呈する。

第四類土器（第9図-12～14）

無文土器を一括した。

12. 口縁部が肉厚し、底部は丸みを帯びた大型の深鉢形土器で、焼成は良好であり、黒みがかかった褐色を呈する。

13, 14. 小型の筒形の土器で、焼成は良好であり、13は黒っぽい褐色、14は

赤褐色を呈しており、粗製といってよいであろう。

2号住居址（第10図-15～21）

復元可能な土器としては深鉢形土器4個、浅鉢形土器2個と深鉢形土器と思われる底部破片が1個、セットして出土した。又深鉢形土器も高さが各々40cm、18.5cm、18.5cm、15cmと大小のセットになっている。

15. 弱い「く」字形をし、波状の口縁を持ち、底部を欠く深鉢形土器で、連続爪形刺突文により隆線を浮き出し、浮き出された隆線により、胸部に複合三角形、口縁は変形した三角形、円形、底部付近は梢円の連續文がある。その外、波状沈線が一条施されている。焼成は良好で、茶色がかった褐色を呈する。

16, 15と同様な底部付近の破片であろう。焼成は良好である。

17. 口縁がやや開いた深鉢形土器で、横位に三本の半裁竹管による平行沈線を三条配し、平行沈線間と平行沈線と底部の間に縦位に3つの、いわゆる「ムカデ状文」を5列配している。その他に文様は無く、焼成は良好で、茶褐色を呈する。

18. 口縁がやや内彎した無文の深鉢形土器で、口縁直下には一対の穴が焼成後穿たれている。焼成は悪く、粗製であり、薄い茶褐色を呈する。土器内部は黒色を呈し、炭化物の付着したものかと思われる。

19. 全面に単節斜縄文が施された筒形に近い小型の土器で、焼成は良好であり、茶褐色を呈する。

20. 「く」字形をした口縁を持ち、底部を欠く浅鉢形土器で、口縁直下に連続突文を施した波状隆線があり、その下は連続爪形刺突文が一条施されている。焼成はやや悪く、褐色を呈する。

21. やや丸みを持った浅鉢形土器で、口縁部に二条の隆線と、その間に連続爪形刺突文を持つ波状隆線があり、二ヶ所でそれぞれ二本に分かれている。胸部には単節斜縄文が全面に施されている。焼成は良好で、褐色を呈する。

3号住居址

復元可能な土器はなく全く破片であり、しかも土器片の数も少ない。連続爪形刺突文が主文様で、これにより三角形又は梢円を浮き出させている。又、波状沈線も多く見うけられる。焼成は良好であり、褐色を呈するものが多い。

4号住居址（第11図-22）

22. 底部がやや開き鼓型に近い深鉢形土器で、口縁と胸部の上部には単節斜

縄文を施した隆帯があり、胸部は連続爪形刺突文により浮き出した隆線により
情円の連続文が構成され、その内側には波状沈線が施されている。焼成は良好
で、暗い茶褐色を呈する。

5号住居址（第11図-23）

発見された土器は全て破片で量も少ない。

23. は5号住居址の埋甕で、深鉢形土器の胴部破片である。単節斜縄文を地
文とし、その上に連続刺突文による波状沈線を施し、又連続爪形刺突文による
波状沈線を施し、又連続爪形刺突文により浮き出された隆線によって複合三角
連続文を構成し、三角形の内側には沈線による三叉文が描かれている。焼成は
粗悪で、暗い茶褐色を呈する。雲母片が、他の住居址の土器に比べ、多量に含
有されている点が注目される。

6号住居址（第11図-24～27）

完形としては杯形土器で、外は大型破片である。

24. 杯形の小型土器で、単節斜縄文をほぼ全面に施している。焼成は良好で、
褐色を呈する。

25. 底部を欠く深鉢形土器で、小把起を一個持ち、口縁部に隆線だけで文様
構成が行なわれ、胴部以下は無文である。焼成は悪く、暗い褐色を呈する。

26, 27 口唇に捻り把手を持ち、文様は連続平形刺突文及び連続爪形刺突文
及び波状沈線により構成している。焼成は良く、両方とも暗褐色を呈する。

住居址外（第12図-28～30）

28. 深鉢型土器で、口唇部と口縁部には把手があり、文様は連続爪形刺突文
により、隆線を浮き出し、浮き出された隆線により、口縁部及び胴部は複合三
角形連続文、底部付近は長情円の連続文があり、口縁部区画文の内側には連続
山形刺突文による三角形及び波状沈線が、胴部の区画文の内側には連続山形刺
突文による三角形文及び沈線による三叉文が施されている。その他、連続山形
刺突文による波状沈線及び単節斜縄文が施されている。焼成は良好で、暗褐色
を呈する。

29. 「く」字形の口縁部を持つ深鉢型土器で、隆線により複合三角形連続文
等を描いた後に連続爪形刺突文を隆線の両側に施している。口縁部には横帶文
及び把手がある。焼成は悪く、底部付近が褐色のほか、その他の部分は黒褐色
を呈する。

30、胴部がくびれた深鉢で、波状の口縁は内側からテニスボール状の物によって押し出されている。文様は、単節斜繩文を地文とし、半裁竹管による沈線により区画が行なわれ、特に胴部は複合三角形連続文を描き、上部の逆三角形は、繩文の上に沈線による渦巻き及び三叉文が施されている。胴部下には、平行沈線が施されたたんこぶ状の把起が四つある。焼成は良好で、下部は淡い褐色を、上部は黒っぽい褐色を呈している。

(森本圭一・竹内清志)

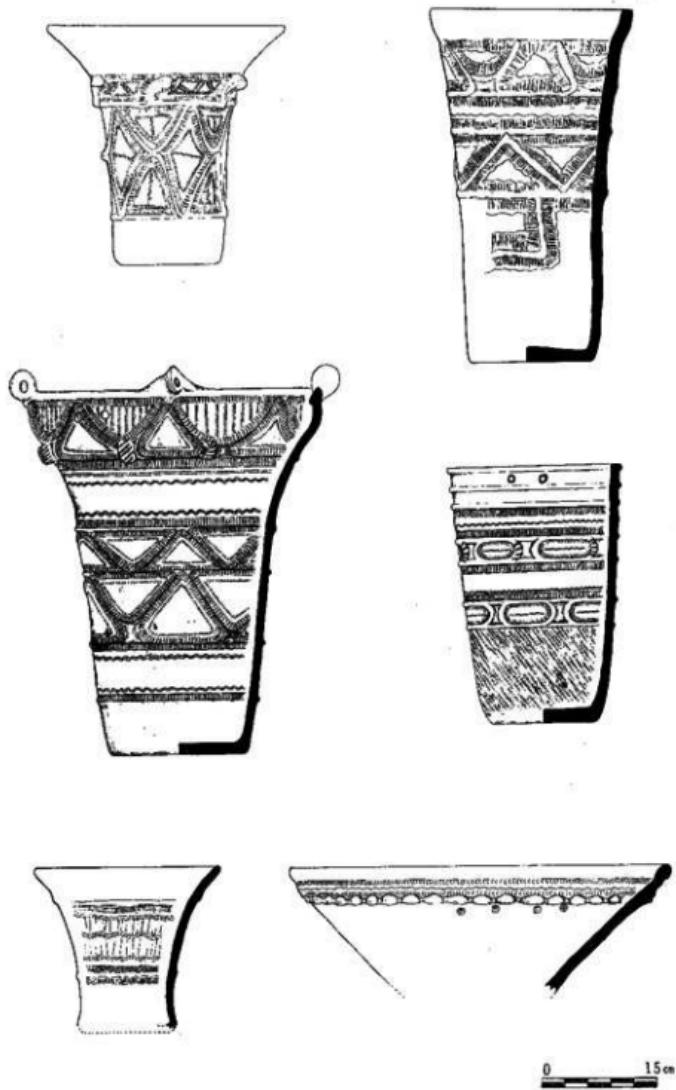
中溝遺跡出土土器の穿孔について

中溝遺跡出土の土器を見渡すと、穿孔の施してある土器が多いことに気付く。この遺跡出土の土器 28 個のうち、5 個（1 号住居址、3, 4, 6, 11, 2 号住居址 18, ）が穿孔を施されており、18 % にもおよぶ比率であり、特に 1 号住居址においては約 30 % にも及ぶ。これらの穿孔を施されている土器のうち、1 号住居址 11, は、他の口縁部分に穿孔が施されているものと異なり、胴体の中ほどに、右下がりの状態で 2 個の穿孔がある。すべての穿孔は、だいたい直径 4 ~ 5 mm で、「つづみ」状又は「円筒」状をなし、「つづみ」状の穿孔の場合土器の外側から作業を行ない、最後に両側の孔周辺部分を整形したものと思われ、「円筒」状のものは、土器面に垂直に外側と内側の孔の直径が同じになるよう穿孔が施されている。また、これらの土器はすべて、土器製作後に穿されたものと思われ、横列に 2 個づつ穿孔されている。穿孔目的については、破損土器の修繕と一般に思われている。たしかに、1 号住居址 6, の浅鉢などは、破損した土器片をつなぐため、口縁部分に土器本体と土器破片に 1 個づつ 2 対の穿孔を施してあることによって、つなぎ合わせられていたと思われる。そして、穿孔を施してある土器のほとんどは 2 個の穴の間に割れ目が存在する。穿孔の後何らかの圧力で 2 個の穴の間に割れ目が生じるのは、力学的に不自然であるので、やはり割れ目を修繕するための補修孔であろう。

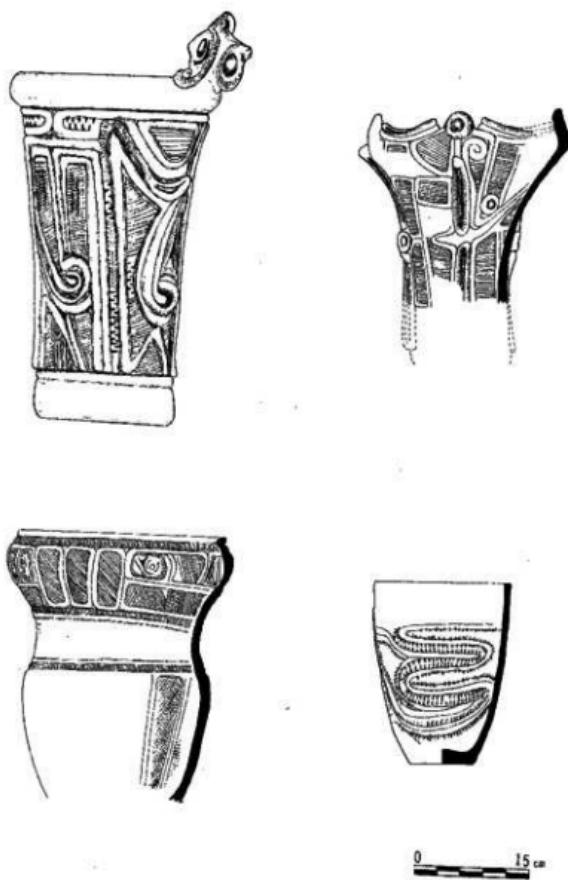
(竹内清志)

出土土製品住居址別集成

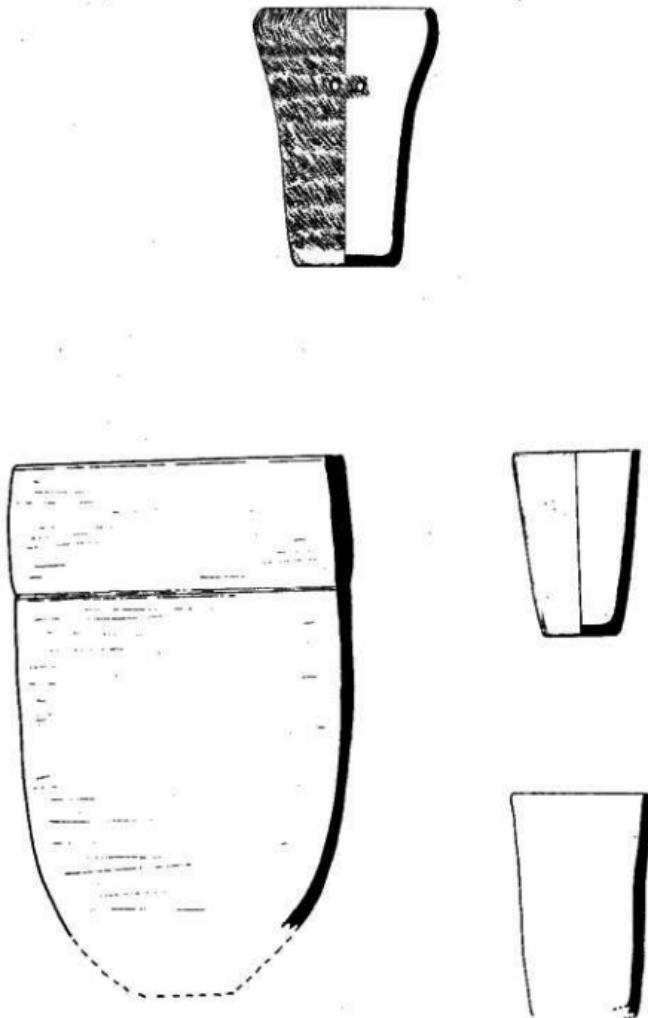
種類 順位	土 器		顔 面 把 手	土 偶	耳 桿
	深 鉢	浅 鉢			
1号住居址	13	1	1	2	1
2号住居址	5	2	2	1	
3号住居址					
4号住居址	1			1	
5号住居址					
6号住居址	1	1 ^(わん 形)		1	



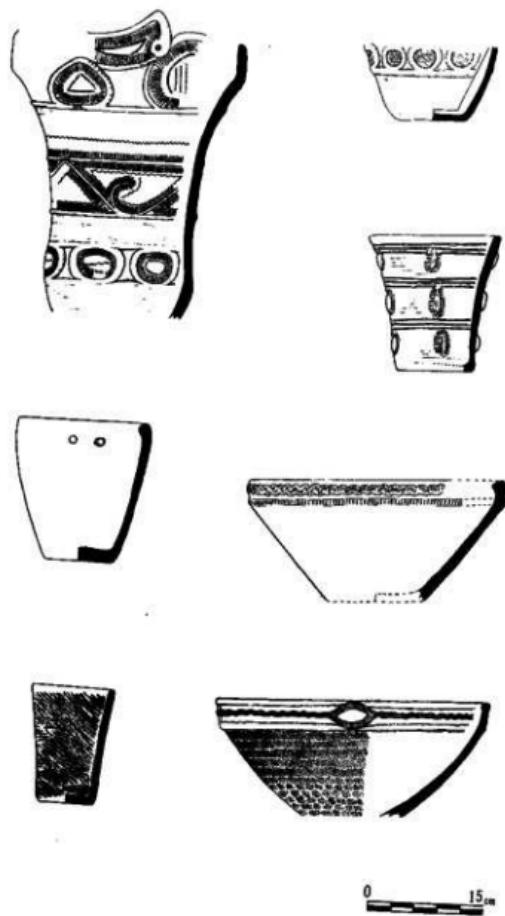
第7図 1号住居址出土土器
(第一類)



第8図 1号住居址出土土器
(第二類)



第9図 1号住居址出土土器 0 15 cm
 (第四類)



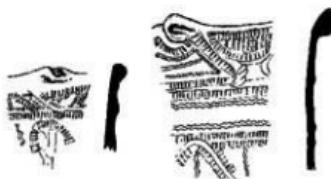
第10図 2号住居址出土土器



4号住居址出土土器



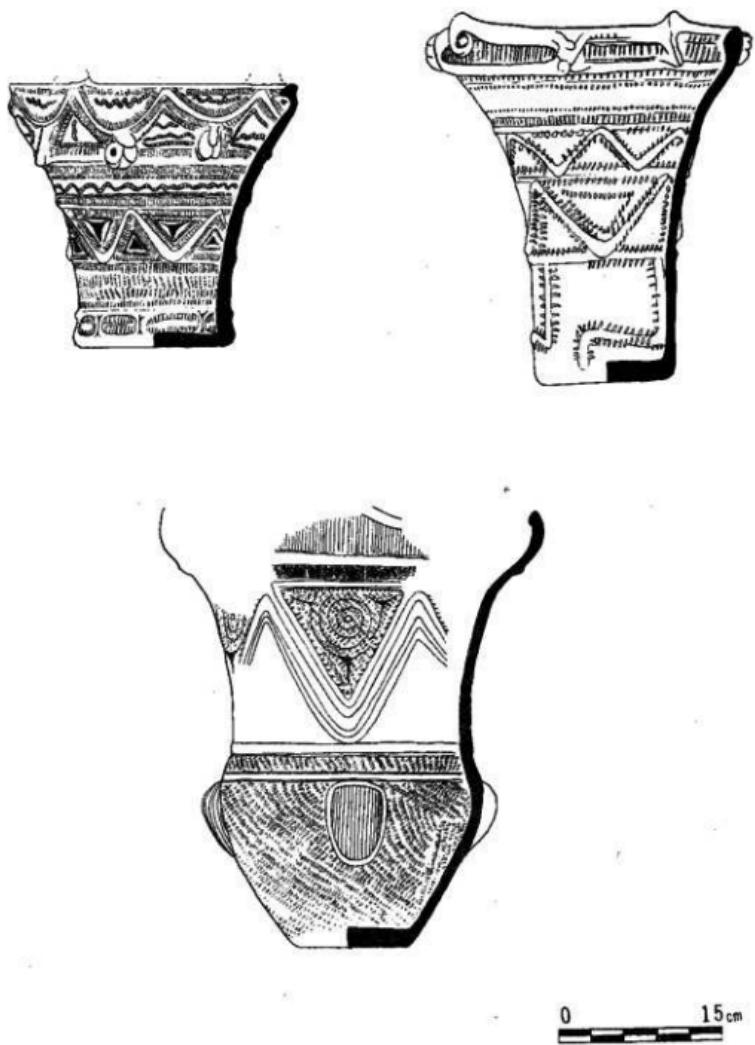
5号住居址出土土器



6号住居址出土土器

0 15 cm

第11図 4.5.6号住居址出土土器



第12圖 住居址外出土土器



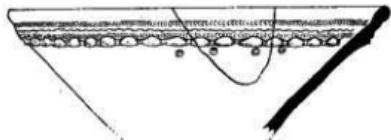
1号住居址 3



1号住居址 4



1号住居址 11



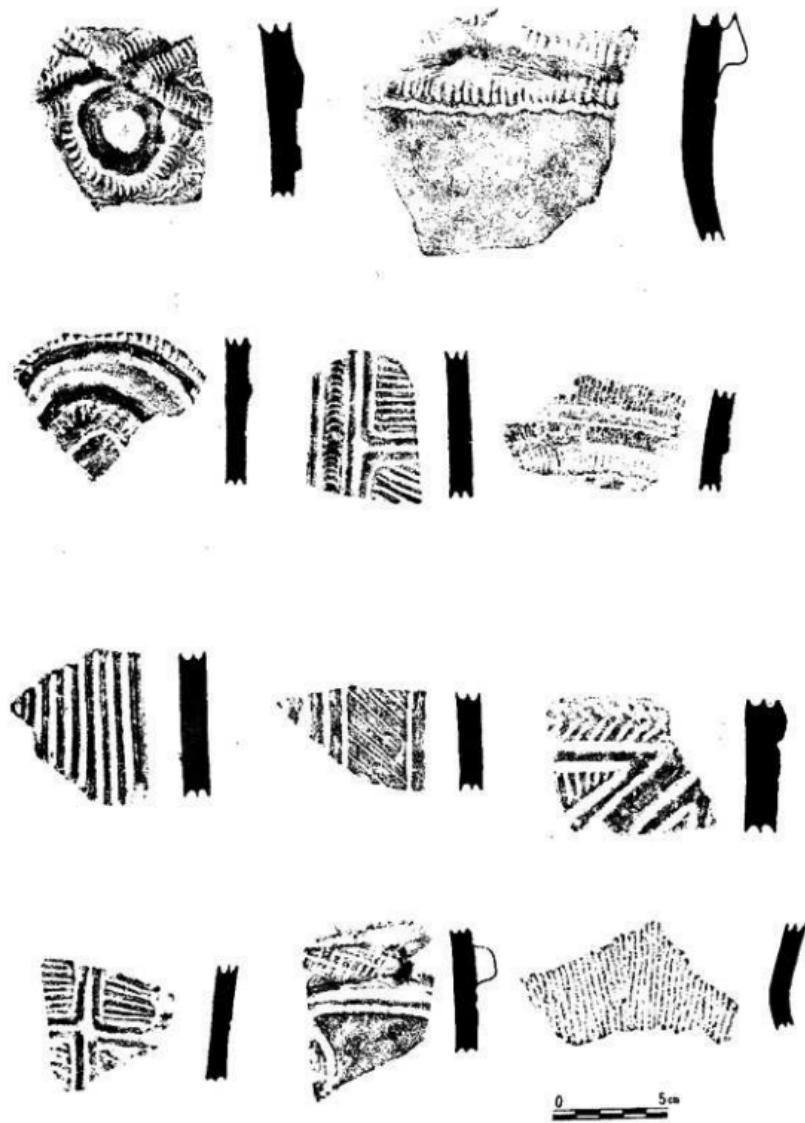
1号住居址 6



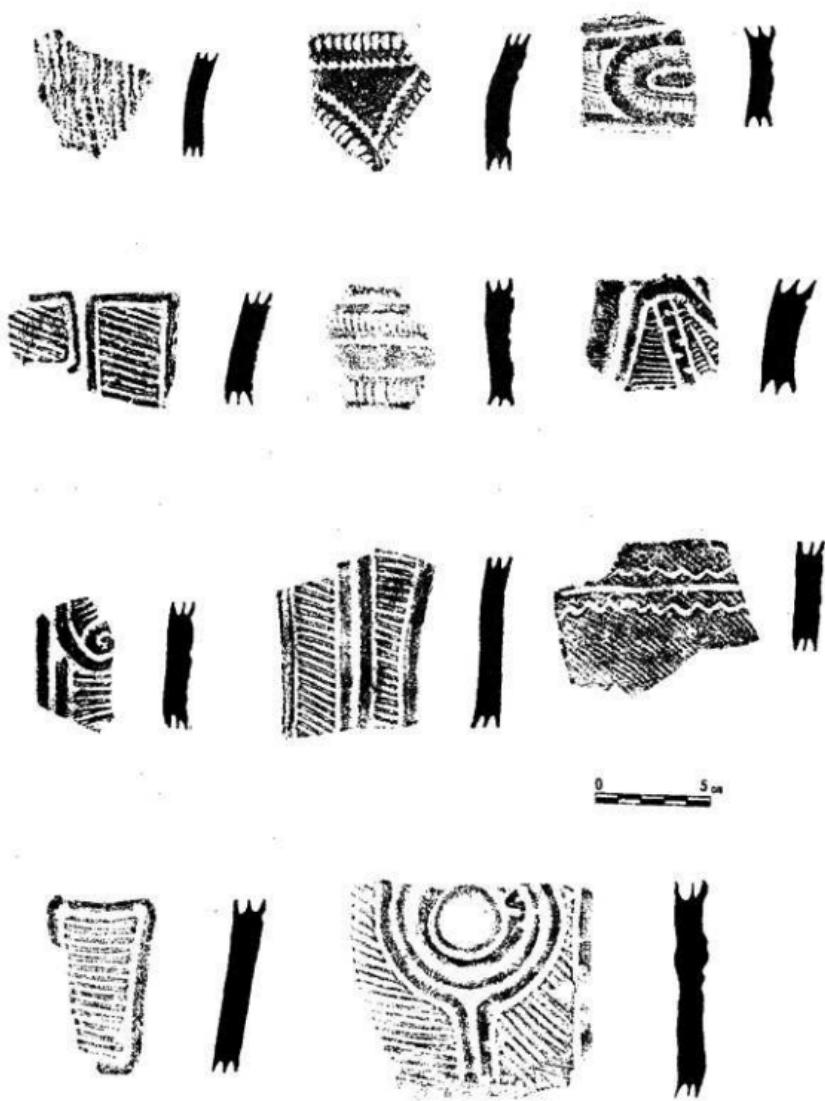
2号住居址 18



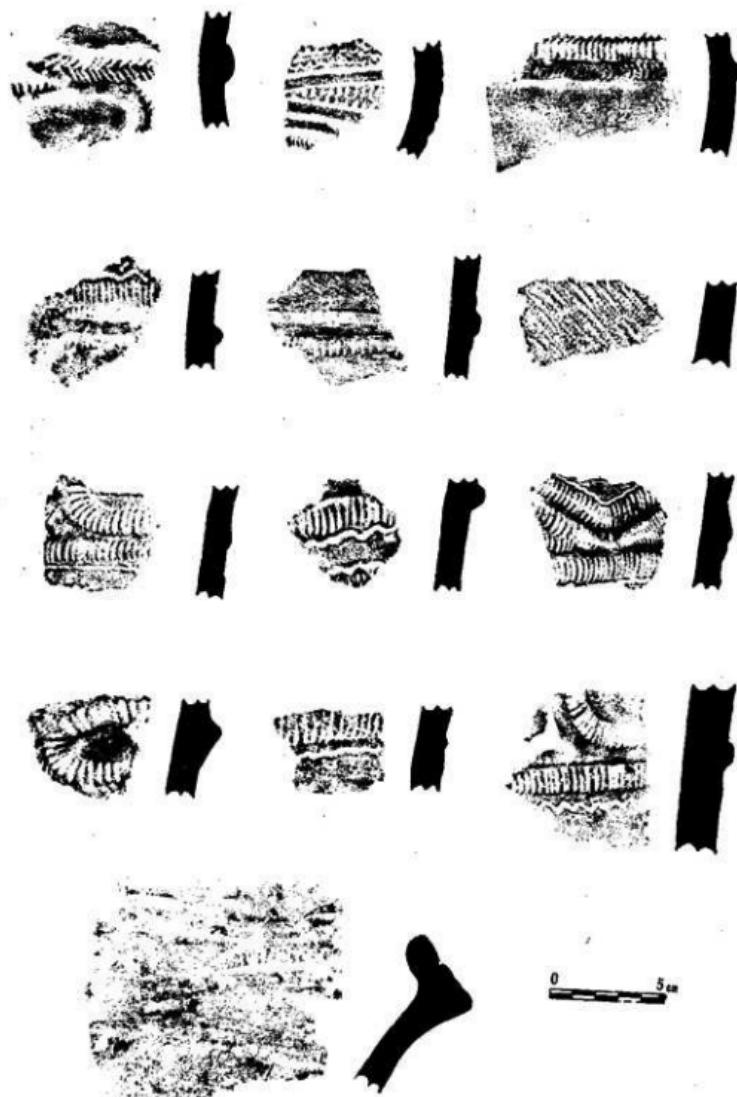
第13図 穿孔を有する土器



第14図 2号住居址出土土器拓影

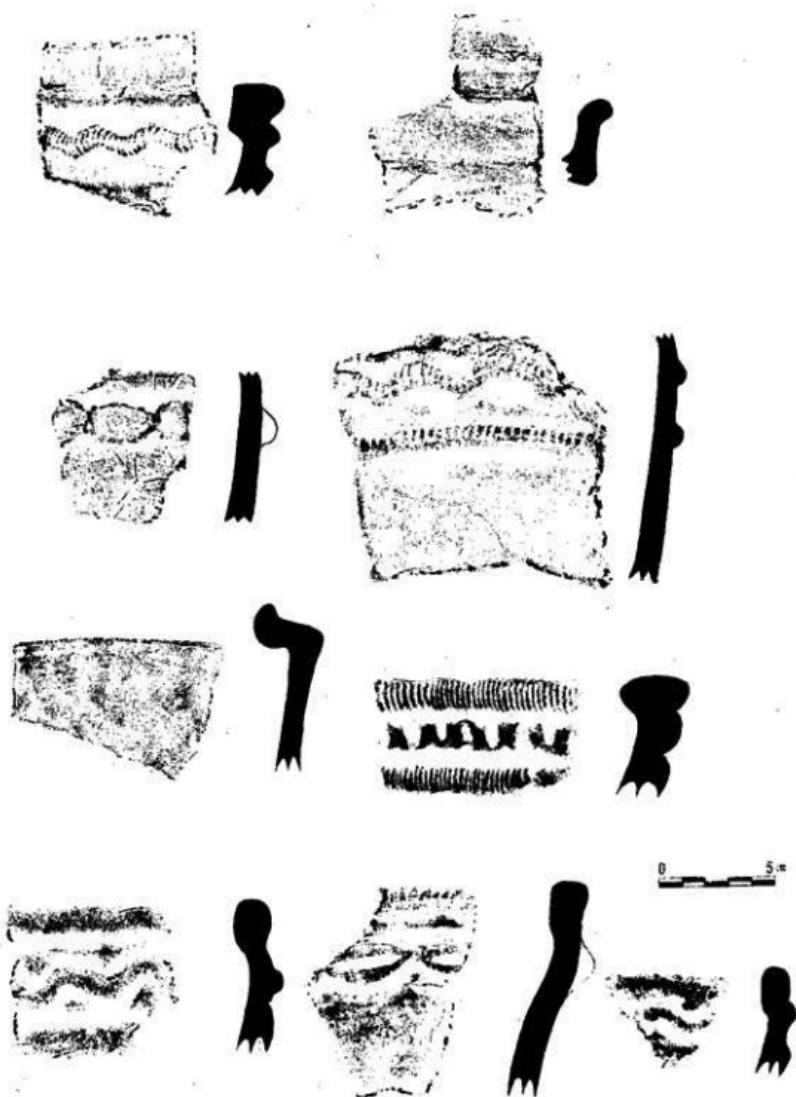


第15図 2号住居址出土土器拓影



3号住居

第16図 3号住居址出土土器拓影



第17図 4号住居址出土土器拓影

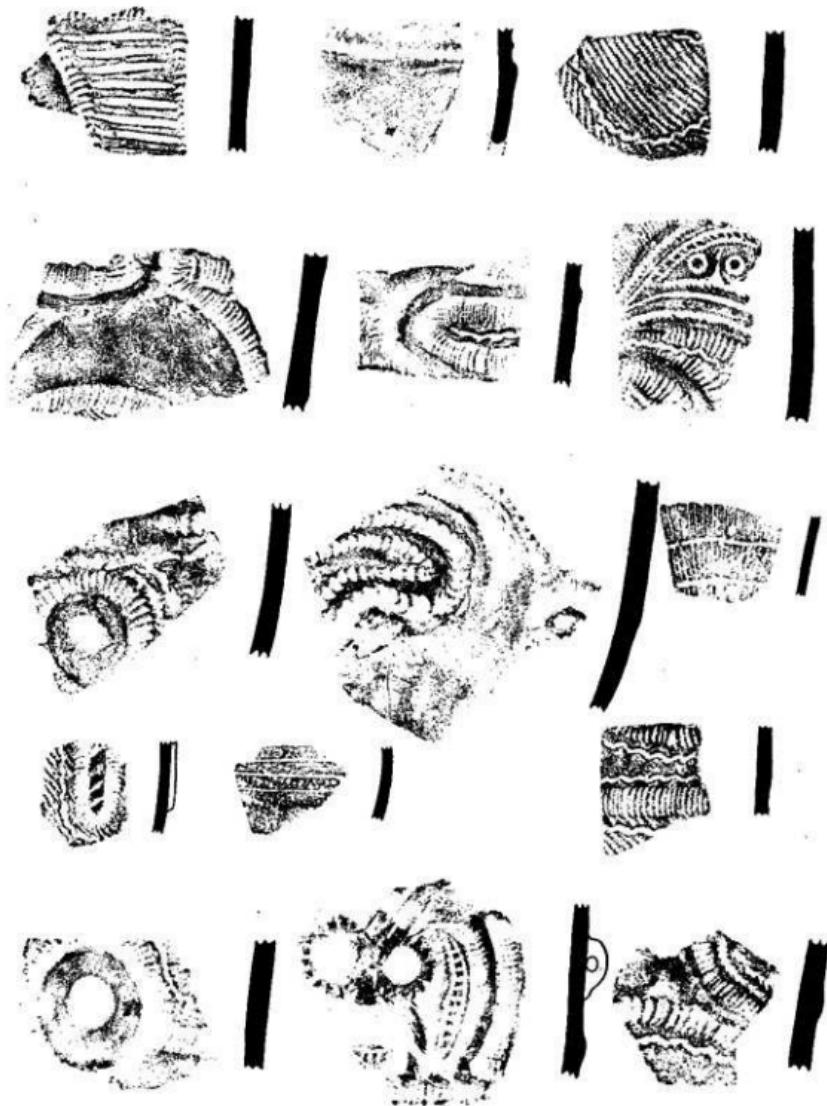


第18図 4号住居址出土土器拓影

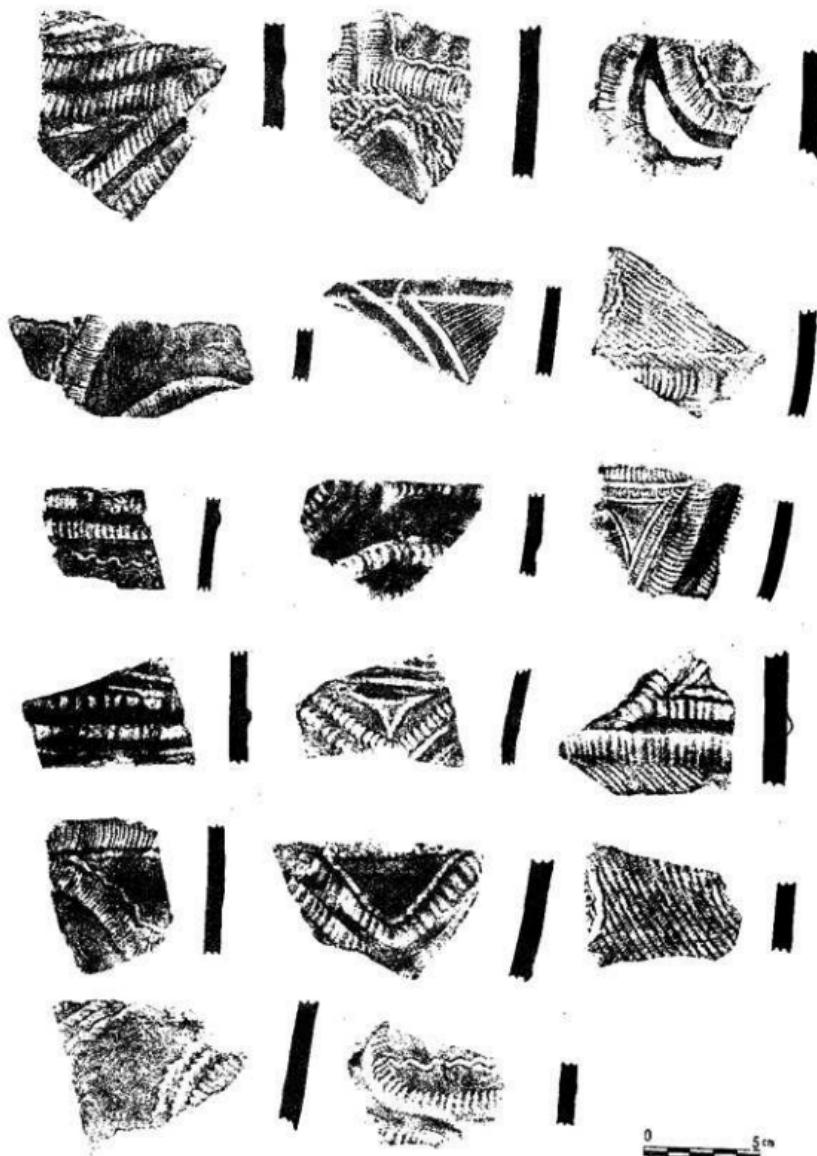


第19圖 5號住居址出土土器拓影

0 5cm



第20図 6号住居址出土土器拓影 0 5cm



第21図 6号住居址出土土器拓影

第 2 節 土 製 品

土偶および耳栓

中溝遺跡の土器以外の土製品は土偶および耳栓である。

土偶は全部で5個出土した。その内訳は1号住居址から2個、2号住居址から1個、4号住居址から1個、5号住居址から1個の計5個で、いずれも住居址内から発見された。

耳栓はただ1個1号住居址から発見されたが、破損して他の土器片と共に採取されたので、正確な出土状況は不明である。滑車型のもので焼成は良好で、褐色を呈し、黒色に焼成された部分があり、少量の雲母の混入が認められる。

土偶 I

土偶Iは工事現場の人達が側溝を掘った際1号住居址の覆土中から採取した土器片を整理中発見したものであるので、一応1号住居址内出土の遺物と想定されるが、出土状況、出土地点、層位等は不明である。

厚さ2~3cmの扁平、板状の土偶で頭部、両うでおよび左脚部の一部を欠いている。

ヘラ状の工具の先端を利用して描いた沈線文様が両脚部側面および前面にあり、背面は無文である。右脚部側面の文様は、3本のくの字型をした沈線が平行して描かれ、下方の1本が先端を右廻りに、ワラビの頭の様にぐるりと円を描いている。

左脚部側面の文様も、3本のくの字型の文様がほぼ平行して描かれ、一番上の一本がその先端をやはり右廻りにまるく円を描いている。

前面には右脚部の中心を1本の沈線が底部まで縦に走っており、左脚部の中心にも同様の沈線が1本縦に走っているが、下部を欠いているので先端の状況は不明である。

左右の沈線の上部からV字型に陰部を現わすかの如くに2本の沈線が描かれているが、先端が欠損部にあたるため不明である。胸部の中心からも1本縦の沈線がV字型の中心に向って走っているが、下部を欠いているため性器を現わしたものか、左右の脚を区別するものか、単なる文様か不明である。

胸部には乳が左右突出している。

頭部は欠損しているが、頭部を接着する欠損部の中心に1mm×2mmの小孔が深さ3.3cm程ほぼ垂直にあけられている。これは頭部を接着するために細い竹片などをさして使用した心棒の跡か、後述の土偶IIIの頸部中央にも同様の小孔

が見られる事から心棒穴と推測されるが、同様な事例が塩山市中萩原重郎原遺跡出土の土偶に見られる旨報告されているが興味深い発見である。

現存部の高さ 6.5 cm、肩巾 3 cm、底部 4.5 cm で、焼成は良好、褐色を呈している。

土偶Ⅱ

土偶Ⅱも土偶Ⅰと同様、1号住居址覆土中から採取されてあった土器片中から発見されたものであるので、一応一号住居址内出土遺物と推測されるが遺憾ながら出土状況、出土地点、層位等は不明である。

円錐型の上部を欠いた形をしており、2個の乳状突起から土偶胸部片と推定される。

前面にはヘラ状の工具の先端をおしつけながら描いた巾 2 mm 程の沈線が左右の乳の中心を通って上部から下端まで描かれており、その沈線と平行に 2 本の沈線が上部から乳の内側の線まで描かれている。乳の周囲も同様な沈線でふちどられている。

左右共 5 本の同様手法の沈線が上部からほぼ等間隔に真すぐに下部まで描かれており背部は無文である。

残存部の上部径 3.2 cm、下部径 4.3 cm、高さ 4 cm、黒褐色を呈し焼成は良好であり少量の雲母の混入が認められる。

土偶Ⅲ

2号住居址東側壁近くの床面に裏向きに置かれている状態で発見された。

半円形の顔かたちをしており、髪形と思われる約 1 cm 巾の外周に、左右に 2 本、上部に 3 本の沈線が描かれている。勝坂式土器に見られる顔面把手の容貌と同一で、目尻が上り、眉から鼻にかけて隆起帯となり鼻下に 2 個の小孔で鼻の穴を現わしている。口は二等辺の逆三角形型をして深くあけられ開口した状態を示している。

頭部は○型、および△型の浮彫状の文様で飾られており、残部は三角形を主体とした刺突によって深くえぐられており結髪の状態を示したものではない。

下部の中心部と両端に、刺突部に対して垂直に貫通する直径 3 mm の小孔があげられている。頸部の中心にも直径 2 mm の丸い小孔があげられているのは、胴部と接着するために用いられた心棒の跡と思われる。

残存部の高さ 10.5 cm、巾 8.3 cm、焼成は良好で褐色を呈し少量の粒砂の混入が認められる。

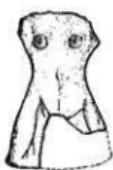
土偶Ⅳ

4号住居址北側床面直上の覆土の中から裏面を上にした状態で発見された。非常に写実的に作成された足くびで5本の指が巧みに表現されている。くるぶしの直上で切損しているが残存部の長径7.9cm、巾4.5cm、厚さ1cm～3.1cmである。

もし1個体に附着した足くびとすると、非常に大きな土偶のものと推定されるが、同住居址内出土の土製品中に同一個体のものと思われる破片は何も発見されていないので、最初から足くびだけであったものか。

焼成はやゝ粗であり、赤褐色を呈し雲母の混入が認められる。

(奥 隆行)



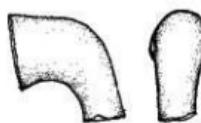
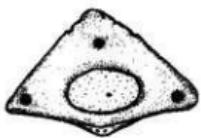
2号住居址



1号住居址



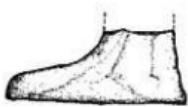
2号住居址



6号住居址



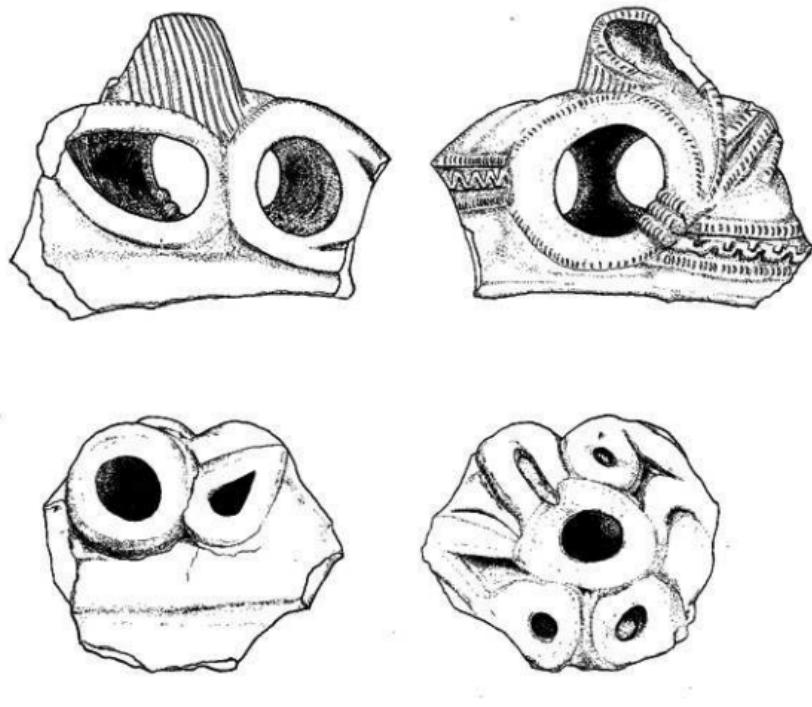
1号住居址



4号住居址

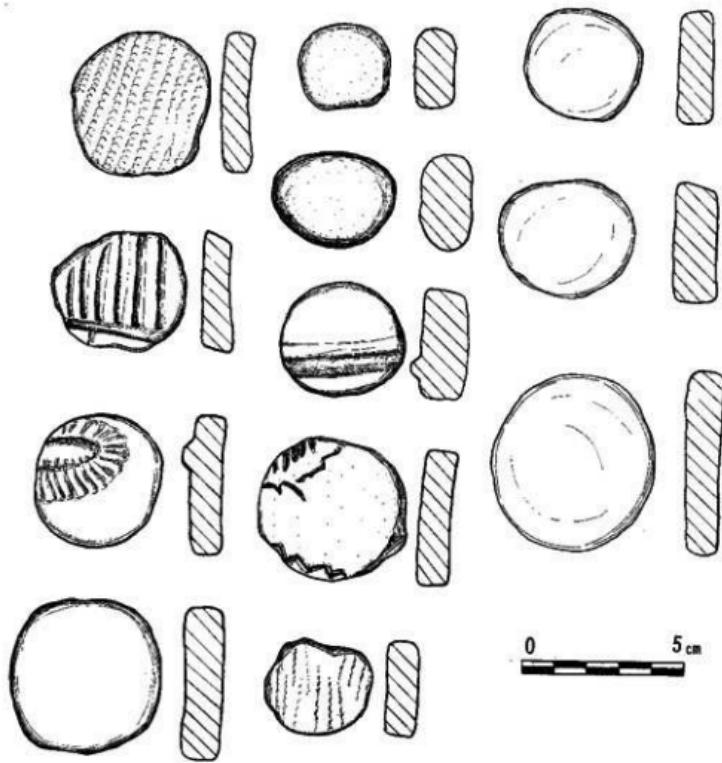


第22图 出土土偶·耳梭



2号住居址

第23図 出土顔面把手



第24図 出土土製円盤

第3節 石製品

出土石製品住居址別集成

種類 順位	磨石斧	石鎌	石匙	石皿	凹石	打石斧	玉	磨石
1号住居址	1		2			21 9(件)		2
2号住居址	1(件)		1	1		3 5(件)		
3号住居址	1		1			6		5
4号住居址	1	2	1	1(件)		18 24(件)	1	10 3(件)
5号住居址								
6号住居址	1(件)		2			17		

(片) ……破片

中溝遺跡の石器については、上表を参照されたい。まず全体的に言えることは、打製石斧の大量出土と、石鎌の微少、大型粗製石匙の出土である。

1号住居址と6号住居址は、耕地整理の工事中に偶然発見されたものであり、両住居址共に、未発掘の範囲もあるために、土表の出土石器の対比は参考程度にとどめたいと思う。

3号住居址は、耕地整理後発掘したものであるが、耕地整理面より住居址面まで浅く、遺物が多少散失している恐れがあるため、出土器量において、はっきりした数ではないかもしれない。

又、5号住居址は、何らかの理由で廃棄されて、その直上に2号住居址が構築されている。石器の出土は皆無であった。

これらのことから注目されるのは、各住居址から磨製石斧が1個づつ、石匙が1~2個づつ出土している点であり、これを特記しておきたい。しかし、この中溝遺跡の2号住居址に代表される打製石斧の少なさと、凹石の皆無、石皿の稀少は、今後の研究の一課題として取り上げておきたい。

I 石 鐵

石鐵は、4号住居址より2個出土しており、共に黒耀石製である。製形のための小さな加工痕のみを有する。

II 石 匙

第25図1は、1号住居址より出土したもので、後面は母岩からの剝離面をそのまま用い、前面に刃部の細かな加工を行なっている。石質は頁岩である。2も1号住居址より出土し、片岩質のかなりの硬度をもつたものである。3は2号住居址、4は3号住居址、5は4号住居址、6、7は6号住居址よりそれぞれ出土したもので、いずれも頁岩質である。出土石匙は、すべて大型粗製のものであり、1・3・4・5・7が横型、2・6が縦型である。横型のものはいずれも横幅が1.0cm前後、縦型のものは、縦幅が8cm前後である。

III 磨製石斧

第25図8は、1号住居址より出土したものである。破損した乳棒状石斧を再び研磨したものであり、刃部には圧痕が見られるが、鋭どさはない鈍端である。9は、3号住居址より出土したのであり、16cm×32cmの乳棒状石斧で緑色を呈する片岩質であり、刃部はていねいに研磨してある。10は、4号住居址より出土したものであり、15cm×4.0cmの片岩質乳棒状石斧である。刃部は、少々破損している。11は、乳棒状石斧の欠損品であり、片岩質である。

IV 打製石斧

出土した石器中最も多く出土し、欠損品、破損品、完形品合わせて103個數えられる。ほとんどのものが短冊型であり、分銅型を呈するものは、ほとんど無かった。調整は粗く、整形した後、第2次加工によって細かく調整されている。石質は、安山岩と頁岩であり、頁岩質のものは石斧としての用に足りるかどうか疑問視せざるをえないほどもろいものが多數ある。これらの石材は、当地によって簡単に入手し得るものである。

V 石 盤

第30図は、4号住居址より出土したもので、使用面はあまりくぼんでおらず、平面に近いものである。その他のものは、住居址外より出土したものであり、前者と同じ石質のものである。

VI 磨 石

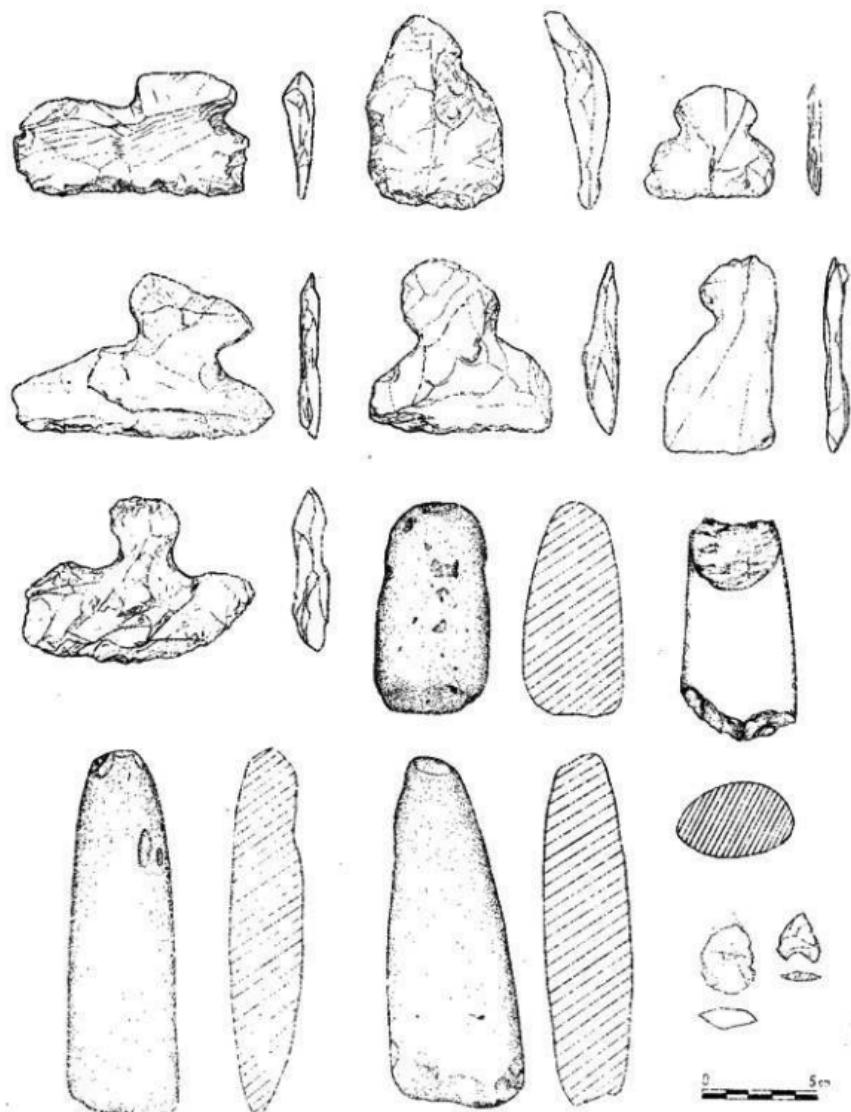
第31図7は、一度破損した面を磨いて作っており、磨石の用途の一面を考えさせる上で重要なと思われる。3の花崗岩質を除いて、すべて安山岩質であ

り、表面は一様に使用痕跡が存在する。

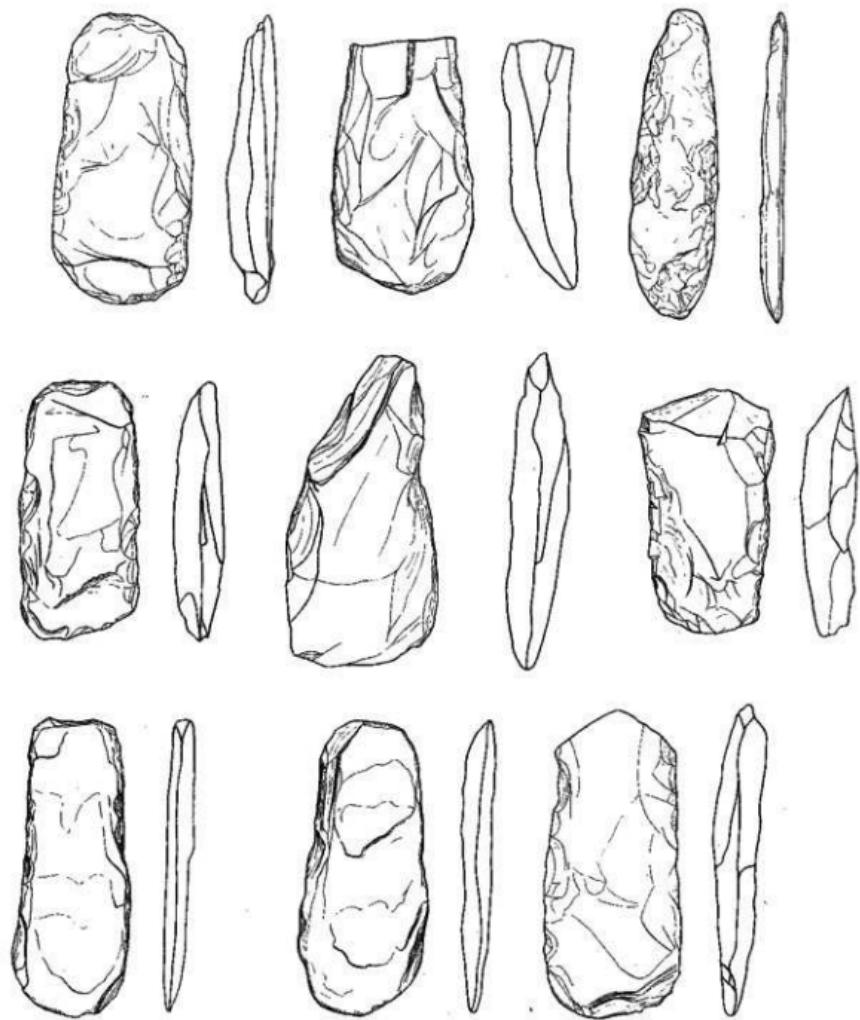
VII 玉類

第31図は、4号住居址より出土したものであり、 $5.9\text{ cm} \times 1.2\text{ cm}$ の大型の玉で、三ヶ月型を呈し、上部より 1.5 cm のところで両面より穿孔が施されているが完通はしていない。全体的に灰白色で、よく研磨されており、加工しやすい滑石質である。

(田村正和・河合良彦)

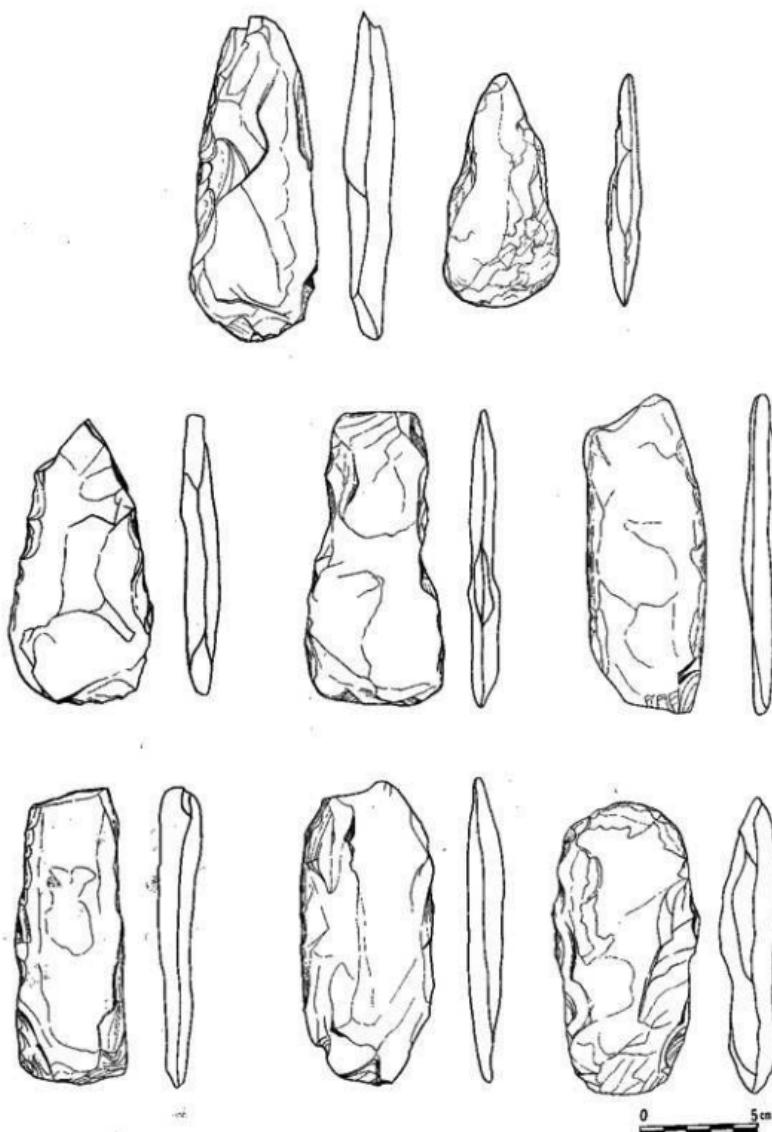


第25図 石器実測図（石匙・磨製石斧）

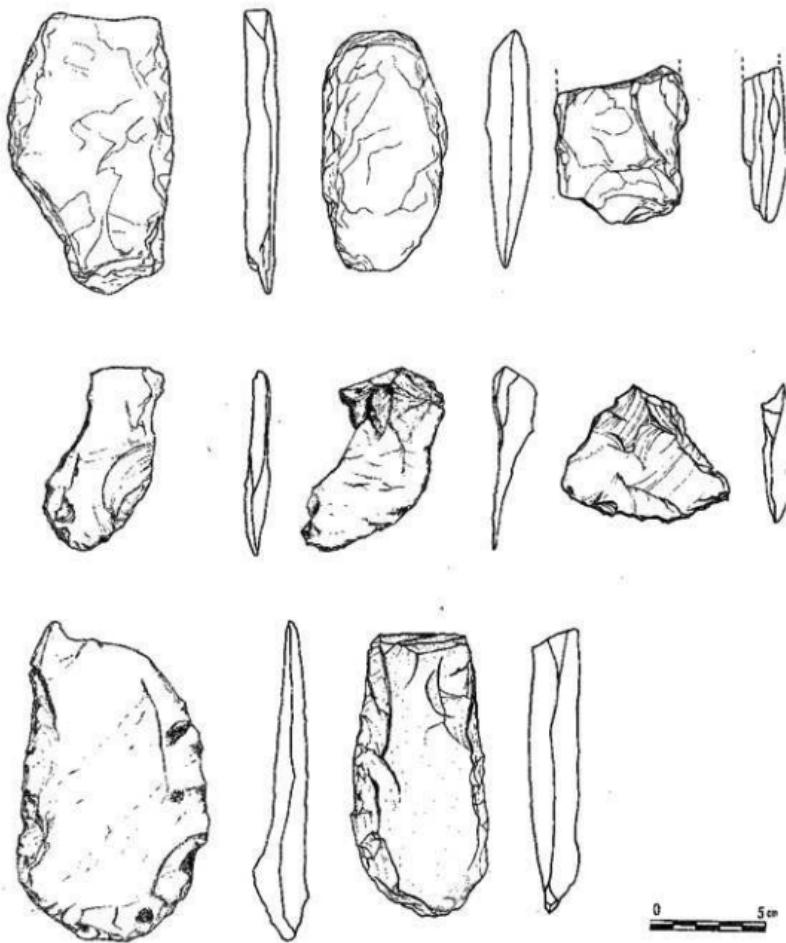


0 5 cm

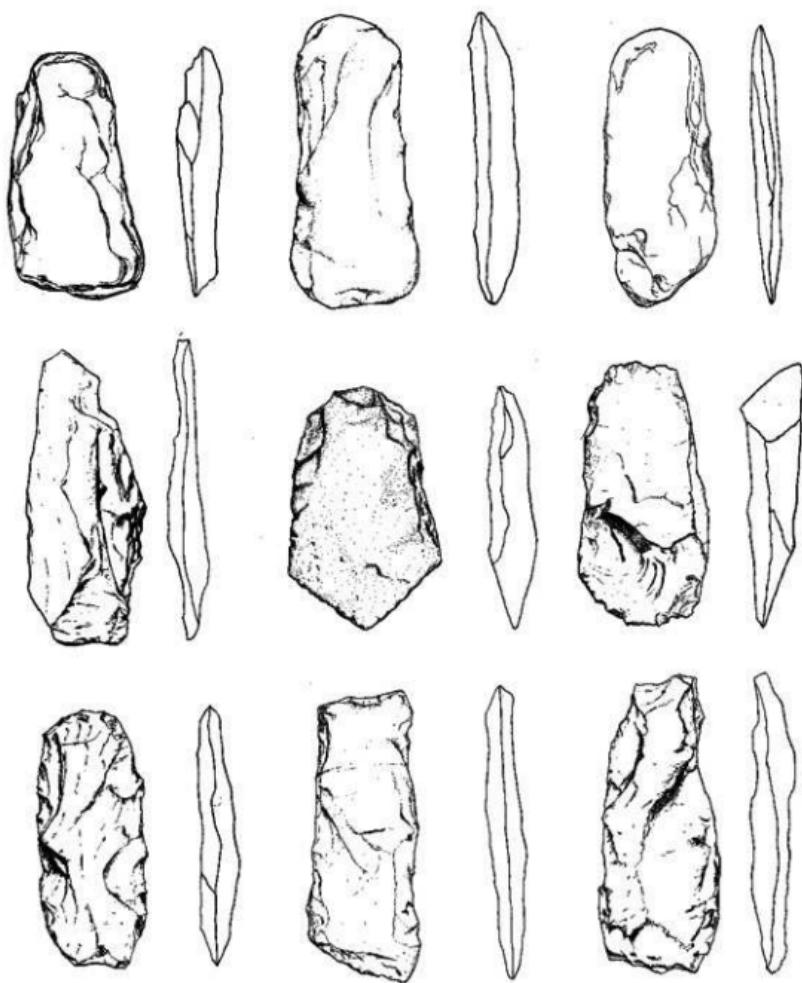
第26図 石器実測図
(1号住居址出土打製石斧)



第27図 石器実測図
 (打製石斧)
 上 2号住居址
 中 3号住居址
 下 3号住居址



第28図 石器実測図
 (打製石斧)
 上 4号住居址
 中 6号住居址
 下 6号住居址



第29図 石器実測図
(6号住居址出土打製石斧)

総 括

編年的位置づけと中溝バターンについて

山 本 寿々雄

山梨県遺跡地図（昭和37年）にも未登録の地域である、中溝遺跡の周辺を絶えず注目しつづけ「農村地域工業導入実施計画」の導入実施にあたって関係機関や直接の工事関係者の協力によってこの中溝遺跡を世に問われることとなったことに対し、すべての関係者に先づ脱帽したい、そして深甚なる敬意を表したいと思う。

その経過については、奥隆行氏が第1章でふれられているのでさけることなし、中溝遺跡が縄文文化中期の最盛期にむけてのタイプ遺跡としてととのった内容をもっている点で今後の研究にはさけて通れない存在となってきた事があげられようかと思うのである。

文字通りのそれこそ一刻を競う緊急調査の直面に立った関係者が一丸となっての協力は四半世紀以上も待ちこがれていた中期縄文文化への解明の手がかりを結果として恵まれ得たことは、よろこばしい限りであり、中溝遺跡が以下述べる編年の空白を埋めるに納得させうるに足るものであると同時に少なくとも中溝バターンを認識する手がかりであることは重要である。即ち研究史上の昭和22～23年にかけておこなった山梨県東八代郡花鳥山遺跡の第一次発掘調査（縄文前期）や北都留郡西原村田和遺跡の調査などは、中期縄文文化研究への足がかりとしてとらえていたものであったが充分に果たせなかった。その後にいたりより地域を括げた甲信地域に散在する新資料の紹介という形の中で、藤森栄一氏が「中部高地の中晩期初頭縄文式土器」を昭和41年世に問うたことは誠に有意義であった。

勿論この間には、山梨県東八代郡中道町東原の中晩期初頭の縄文式土器を筆者が紹介した（昭和34年）つづいて同町の下向山遺跡が吉田格氏によって報告され（昭和43年）その前年北巨摩郡高根町北割出土の資料について谷口一夫氏が述べている（昭和42年）。

また都留文科大学考古学研究会が同様北巨摩郡発見の縄文中晩期初頭土器について述べている（宮島了誠、福沢 裕氏）

このような動きを眺めてみると、各々の取組の中において、絶えず止揚され

てゆく努力をつづけながらも今回の中溝遺跡のように、中期縄文文化の最盛期にむけてのまとまった資料は見出せなかつたし、以外と空白を埋めるまでには至らなかつたのが事実である。

かゝって報じてみた東原遺跡のものが、長野県諏訪湖沿岸地域では踊場期のものとして理解されてきたし、同八ヶ岳南麓地域では、九兵衛尾根Ⅰとして考へてゐる藤森栄一氏の見解を、南関東との間に山梨県を設けて見た場合、中道町下向山遺跡の位置づけを、南関東の「五領ヶ台」～八ヶ岳南麓の「九兵衛尾根Ⅱ」諏訪湖沿岸の「神殿、唐沢」に併行するものと理解したとき、ここに始めて登場する中溝タイプの縄年の位置がその直後に置かれる資料として充分な意義を持つものであると考えている。

そして地形的にみても中溝集落が小形山大原台地の中央部に占地している点は、中期縄文文化を榮えさせた、例えば長野県井戸尻遺跡群に見られるようより広い台地に集落が降りてくるのと同じであることに気付くのも自然的な環境として充分なものを持ちあわせていたのであろう。

山梨県における中期前半の縄文式土器の編年

諏訪湖沿岸	八ヶ岳南麓	山梨	(南) 関東
晴ヶ峯式	籠烟式	花鳥山	
踊場式	九兵衛尾根Ⅰ	東原	
梨久保式			五領ヶ台
神殿式	タⅢ	下向山	
唐沢式			
後田原	新道	中溝	
	貉沢	柳田	阿玉台
	藤内Ⅰ	北原	
	タⅢ		
	井戸尻Ⅰ		勝坂
	タⅡ		
	タⅢ		

中溝パターンについて

さて以上記したところにより、中溝遺跡のもつ網文式土器の縦位置づけが想定されるのであるが、発掘された堅穴住居地が他の堅穴住居地との距離においてもまた、縦的にも大きく離れた位置にないこと。

第2に補修孔を有する土器の一括遺棄がみられること。

第3に土器を含めての遺物が床面のそれよりも上部の覆土(20~50cm)に遺棄されていること。

第4に土偶、玉、耳栓(欠損品)等の装身具類が、住居址内に限って、覆土中を含めて遺存されていることが多いこと。

第5に相対的にみて出土する遺物にアンバラがあること(例4号住居址と3号住居址)(2号住居址と5号住居址)等により網文人の住居と遺物の放棄(遺存)という事象を類型の中にまとめて整理できるのではないだろうかという考え方を持つにいたり、或種法則性を見出したいと思うのである。

即ち基本的なものとして

〔住居の廃絶〕→〔遺物の廃棄〕

↓(原因の発生)(事物の処理)

〔住居の構築〕

としてこれ等のより近接した住居址の間には、土偶及び玉類、耳栓などの装身具が遺存されている例をし住居址はあげられるパターンで、完形土器とか補修孔を有する土器の有無にはかかわらないことをもって類型として整理の方法としたい。ただ從来から土偶等装身具類が、特殊な遺構内からの発見報告があるが特に土偶等、出土状況に不明の点が多い。しかし最近住居址内の床面及び覆土中という例が増加している事実にも注目し住居址内、遺物の在り方等その軸とした。もっとも隣接の小形山中谷遺跡では、配石遺構中に多量の土偶、耳栓、玉類の遺存を確認しさらにその下部層から住居址の検出を見るという事例もあることではあり、住居址内出土の土偶・耳栓・玉等の遺存をめぐるその在り方も中溝パターンの類例の中から解きほぐされてゆくであろうかと考えたからである。

山梨県内の調査例からパターンを求める

I甲府市上石田遺跡の第1号住居址の2次生活面としてとらえた谷口一夫氏の見解は、中溝パターンの範疇に入るものであり(藤内I~井戸尻II式の土器)この場合の土偶は氏が述べているように畳面を向き立てられた形で遺存されて

いる点（欠損品）注目しておきたい。

なお土器の多くは胴部以下を欠いているが破片であり骨粉が平均して認められたというから或は縄文人のそれであったのかも知れない。近接地に2号住居址を検出している。

Ⅱ塩山市中萩原重郎原遺跡

36ヶの復元土器の中15ヶが胴部以下を欠いている、土偶を遺存しているらしい、詳細は不明であるが、中溝パターンの範疇に入るものであろう近接地に住居址の確認は不明であるがあげておく。

Ⅲ東八代郡御坂町桂野遺跡

住居址は3ヶ所あり近接する。土偶を住居址内から確認している。胴部以下を欠損する土器が半数を占めている、農道工事の際の発見で要を得ない点もあるが中溝パターンの範疇に入るものと考える。

Ⅳ韮崎市藤井町坂井遺跡

昭和17年調査の第4地区（北に傾斜した地点の炉址・カ・ヨ・タ址と土偶・土鈴なども中溝パターンの色彩が濃厚である。住居址が接している（4住居址）

隣接の県外の事例について

I 広義の吹上パターン例を報告した東京都多摩ニュータウン46遺跡の場合。

1号住居・2号住居・7号住居・8号住居に吹上パターンを認めており、吹上パターンのない3号住居址についてである。

即ち3号住居址覆土中より欠損品の土偶がある。（1号・2号・4号住居址が近接）

II 井戸尻パターンとして認め長野県富士見町井戸尻遺跡（大冊井戸尻所収の遺跡群より）の場合。（すべて土偶を遺存の例から）

(ア) 井戸尻2号住居址（3号住居が近接）

(イ) 九兵衛尾根2号住居址（1号住居址が近接）

(ウ) タ 1 タ (2号 タ)

(エ) 徳久利13号住居址 (14号 タ)

(オ) 同 1号 タ (9号 タ)

(カ) 大花1号住居址 (2号・3号 タ)

(キ) タ 2号 タ (1号・3号 タ)

(ク) 猪沢4号 タ (3号・5号 タ)

等があげられる。このようにして中溝パターンを例えれば広義の吹上パターン

井戸尻パターン外等より再考してみたのであるが、他の遺跡群からも中溝パターンの範疇に入るものがある東京都町田市鶴川遺跡群におけるJ地点11号住居址外がそれであろう。その他集落址を調査された事例の中にも求めたいが誌面の都合もあり、他の機会に譲ることとし、住居址内遺存の土偶・耳栓・玉等の装身具について他の近接住居址との関連において、時間的にも空間的にも追跡する必要があろうかと思う。

そのようなよりどころとなってきた中溝遺跡の総括として敢て中溝パターンを提唱する所以である。

参考文献

- | | | | |
|----------------|------------------------------------|---------------------|-----|
| ① 山本 寿々雄 | 銅鏡11号 | | 昭30 |
| ② 同 | 山梨県の考古学外 | | 昭43 |
| ③ 藤森栄一 | 中部高地の中期初頭縄文式土器
—甲信に散在する新資料の紹介— | 富士国立公園
博物館研究報告16 | 昭41 |
| ④ 山本 寿々雄 | 山梨県東八代郡中道町
東原の中期初頭の縄文式土器 | 同 2 | 昭34 |
| ⑤ 吉田 格 | 山梨県東八代郡
下向山遺跡 | 考古学雑誌
48-3 | 昭38 |
| ⑥ 谷口一夫 | 八ヶ岳東南麓の中期縄文式土器
—高根町北割出土の土器について— | 甲斐考古2
〃5 | 昭42 |
| ⑦ 宮島了誠
福沢裕裕 | 北巨摩地方発見の縄文
時代中期初頭土器 | 甲斐考古5 | 昭43 |
| ⑧ 山本 寿々雄 | 前掲書②と同じ | | |
| ⑨ 吉田 格 | 同 ⑤と同じ | | |
| ⑩ 都留市教育委員会 | 中谷遺跡 | | 昭48 |
| ⑪ 谷口一夫 | 上石田遺跡 | 甲府市教育委員会 | 〃 |
| ⑫ 同 | 山梨県大菩薩嶺西麓出土の
中期縄文式土器 | 信濃21の4 | 昭44 |
| ⑬ 同 | 黒駒発見の中期縄文式土器 | 富士国立公園博物館
研究報告 2 | 昭34 |
| ⑭ 山本 寿々雄 | 山梨県の考古学 | | 昭43 |
| ⑮ 志村 滉藏 | 坂井 | | 昭40 |
| ⑯ 遺跡調査会 | 多摩ニュータウン遺跡報告7 | | 昭44 |
| ⑰ 藤森栄一 | 井戸尻 | | 昭40 |
| ⑱ 遺跡調査団 | 鶴川遺跡群 | | 昭47 |

中谷遺跡の研究

都留市小形山中谷遺跡は、先に「中谷遺跡」として報告書が刊行されたが、まとめが遅れ、詳細について記述できなかったので、この報告書の紙面を借りて発表させてもらうことになった。

I、黒耀石塊の集積について

当遺跡から出土した黒耀石片の量は、出土した石器の量（99ヶ出土した）に比例して膨大な量であった。石器等の黒耀石製石器については、既刊の報告書に記してあるので、それを参照願いたい。ここで特に取り上げて述べたいのは、グリッドの配石下より集積した状態で出土した48個の黒耀石塊である。これらは、だいたい2種類に形態状分類でき、 $1.5\text{ cm} \times 1.5\text{ cm} \times 4\text{ cm}$ の角柱状をなすものを中心に19個、不定形のものが28個、不定形石器1個である。

これらには、気泡や節理があまり存在せず、良質な黒耀石であり、集積の中から不定形ながらも石器が出土していることから、この集積は、石器作成のための屋外貯蔵であったかも知れない。しかしながら、これらが出土した地点には、何の遺構も確認できなかった。

II 耳栓

耳栓については、多数出土したにかかわらず、既刊の報告書には、ほとんど触れなかったので、ここに述べておきたい。出土数は、28個という膨大な数であり、完形品が19個で残りの9個が破片である。いずれも精製品であり、完形品については、既刊の報告書に図面を載せたが、破片については、何も触れなかったので、ここにまとめて発表することにした。第32図は、何らかの土偶と耳栓との関連を探ってみようと試みたものである。

完形品					破片				
番号	直径(cm)	幅(cm)	色調	備考	番号	直径(cm)	幅(cm)	色調	備考
1	3.0	1.6	褐色		20	8.4	2.0	黒褐色	塗朱
2	3.0	2.1	黒褐色		21	8.4	2.9	々	
3	3.4	1.9	褐色		22	8.8	2.2	々	
4	2.3	1.5	黒褐色		23	7.5	2.1	々	
5	3.0	1.8	々		24	6.9	2.0	々	
6	5.0	1.7	々	塗朱	25	7.5	2.4	々	
7	6.2	2.0	褐色		26	7.5	1.8	黒色	塗朱
8	1.5	1.4	々		27	6.3	2.1	々	
9	2.1	1.4	々		28	5.7	2.1	々	塗朱
10	3.6	1.6	黒褐色						
11	1.5	1.7	褐色	塗朱					
12	1.6	1.9	々	塗朱					
13	7.2	2.0	黒褐色						
14	4.3	1.7	褐色						
15	6.0	1.9	々						
16	4.1	2.3	黒褐色						
17	4.2	1.7	褐色						
18	4.0	1.6	々						
19	3.8	1.5	々						

III 自然遺物について

自然遺物については、既刊の報告書を参照されたいが、鹿骨の他に鹿の角と歯と思われるものが出土しているので、その報告と実測図を付しておきたい。
(第37図)

IV 土器底部網代について

中谷遺跡の網代底を有する土器は、5個体分(完形品なし)出土している。その網代の編み方は、「1本超え1本潜り1本送り」のいわゆる平編みが2例、「2本超え3本潜り1本送り」が1例、「1本超え2本潜り1本送り」が1例

であった。また残りの1例については、「1本超え2本潜り1本送り」と、「1本超え1本潜り1本送り」とが共存している。完形品が存在しないので確かにすることは言えないが、網代を有する土器の器面には、いずれも文様が存在しなかつた。

(山本正則、竹内清志)

一、木炭の出土と経過

測定対象となったものは都留市教育委員会による去る昭和47年7月小形中山谷遺跡の発掘調査の際、配石造構の下、方形住居址より出土した木炭で、(直径20cm、長さ3m)支柱に使用されたものと思われる。材質は針葉樹で、ツガかモミと考えられる。

この木炭によって、住居址の年代を知りたいと思い、静岡大学の飯島先生にお願いしたところ、先生は海外に行かれるのでと言って、京都産業大学理学部の山田治先生を紹介して下さった。早速(昭和48年9月)山田先生にお願いしましたところ、直ちにご快諾下されたので、資料と共に出土地や出土状況を書き添え先生の許に届けた。

二、木炭の年代測定の経過と結果

山田先生は昭和49年3月25日次の手紙に添え、測定書を送って下さった。

「少々測定器の安定化に時間がかかり、報告がおそくなりました。幕までに一応の結果は出たのですが、装置が故障つづきでしたので、もう一度たしかな結果が出せるまでと考えまして再度測定いたしました。その結果は2回ともほぼ満足できる値で一致いたしましたので安心しました。別紙に記した通りです。」

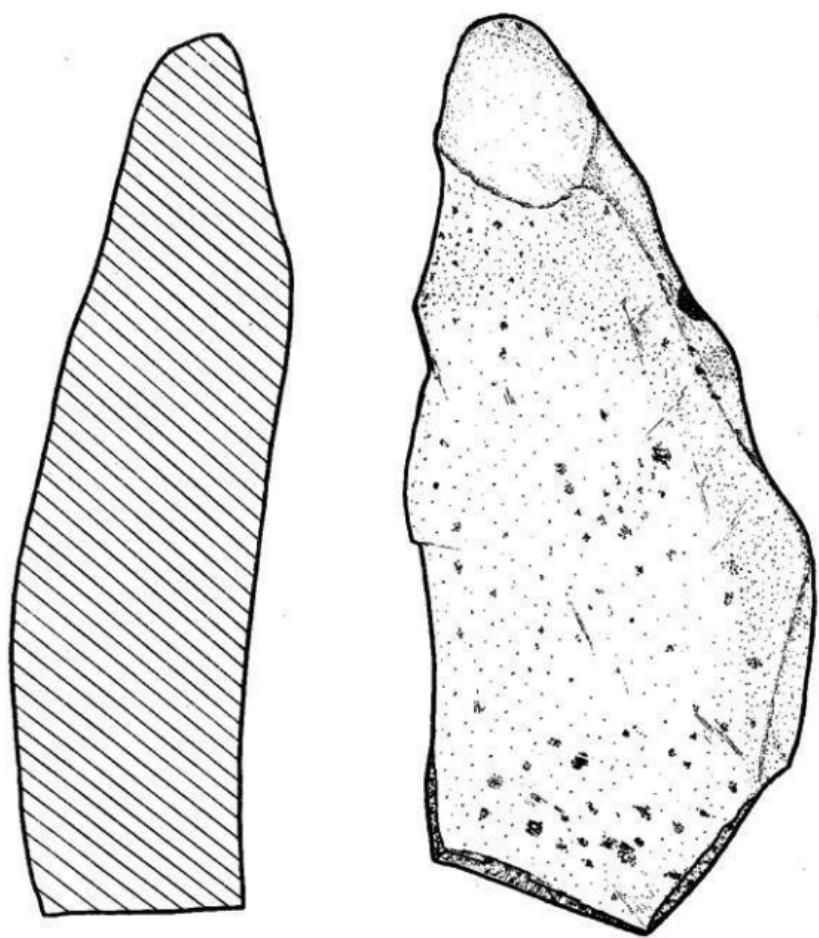
別 紙

都留市小形中山谷地区出土の縄文遺跡の炭素年代測定値

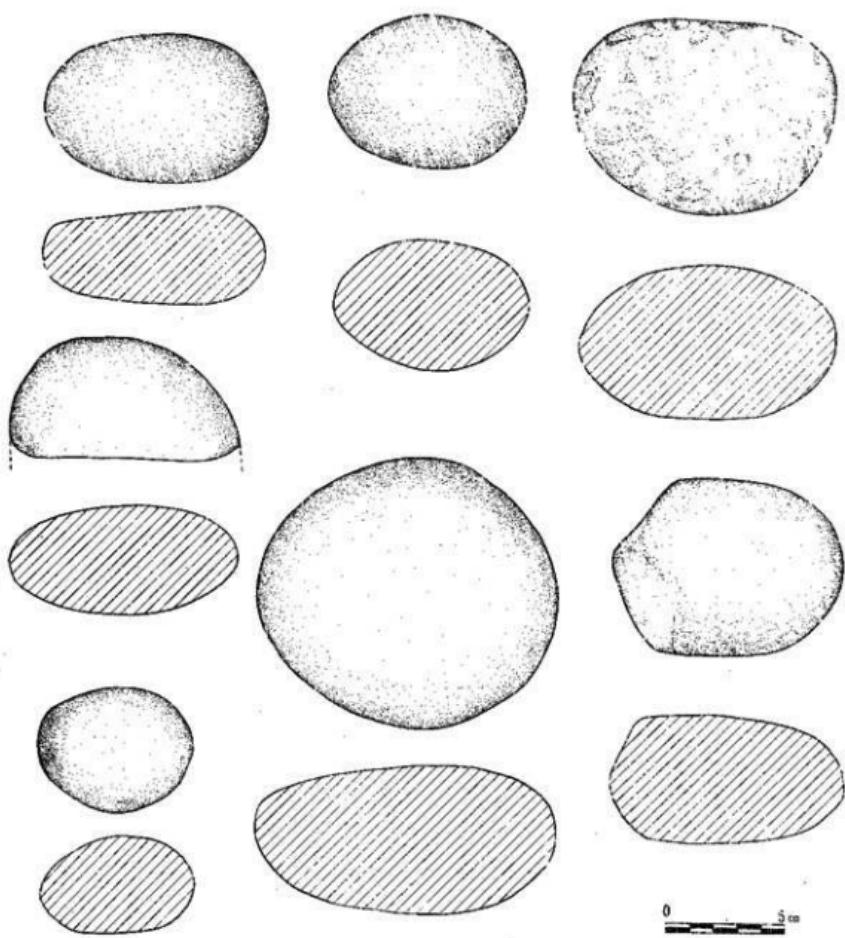
遺跡名称	中谷遺跡
試料番号	T L S - 7 3 0 3 0
試料形状	炭 約70g (精製後40g)
年代測定値	3560±20 B.C. (1610 B.C.)

中谷遺跡調査団顧問

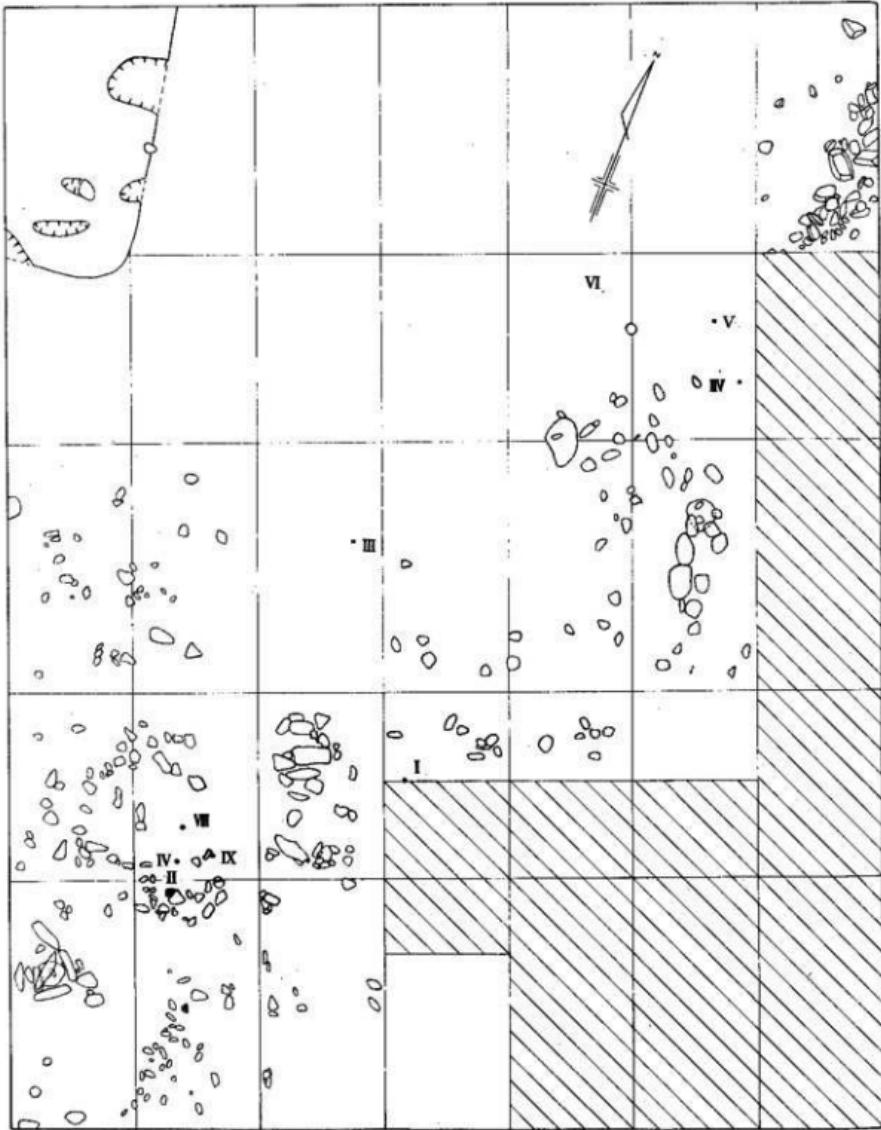
都留文科大学教授 篠原 博



第30図 石器実測図



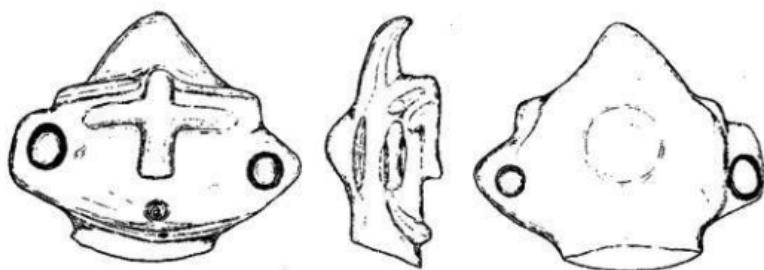
第31図 出土磨石



第32図 配石遺構実測図

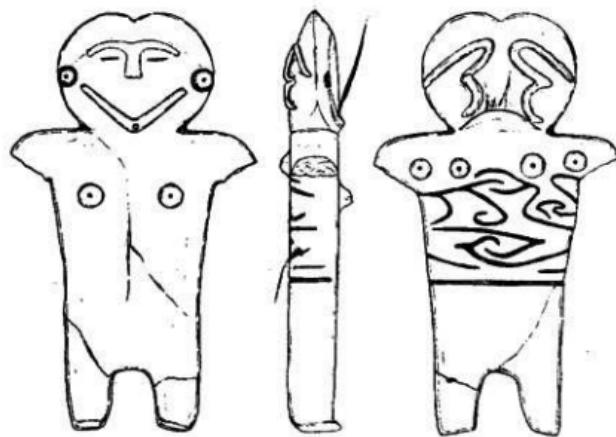
● 土偶片出土地点
○ 耳挖出土地点
△ 玉類出土地点
□ 石刀出土地点

縮尺 $\frac{1}{40}$ 未発掘区域



土偶 I

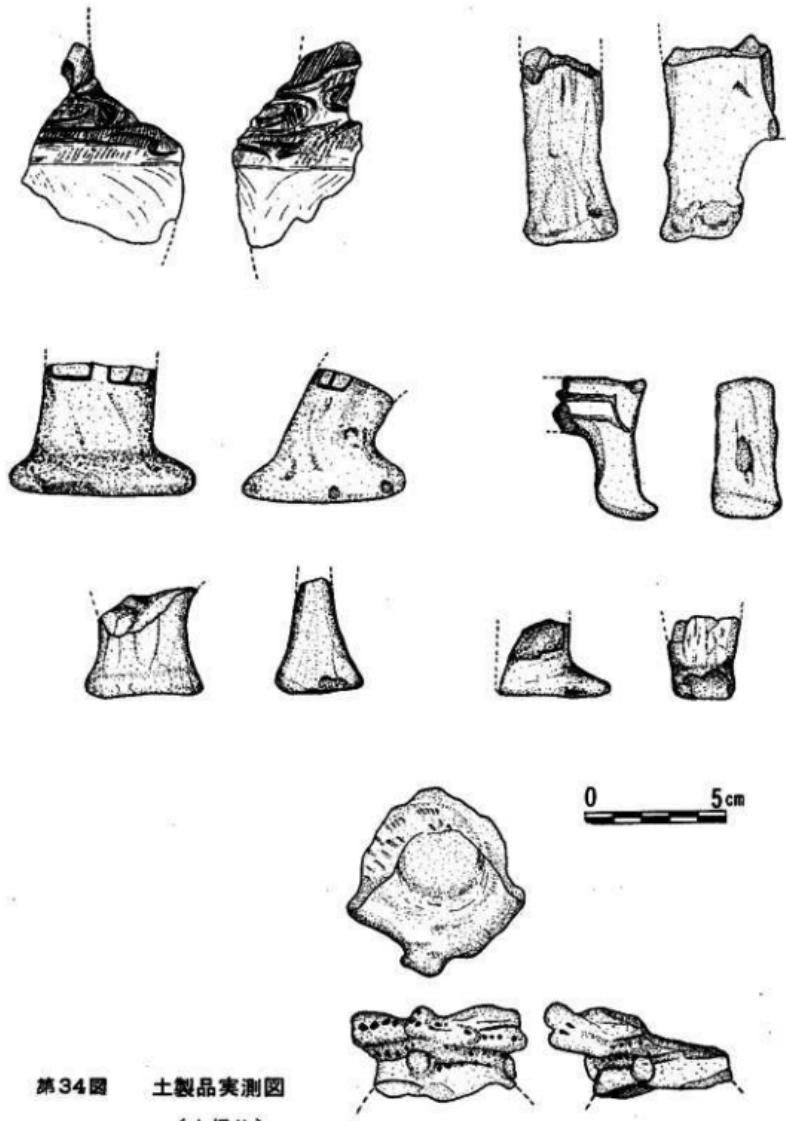
0 5 cm



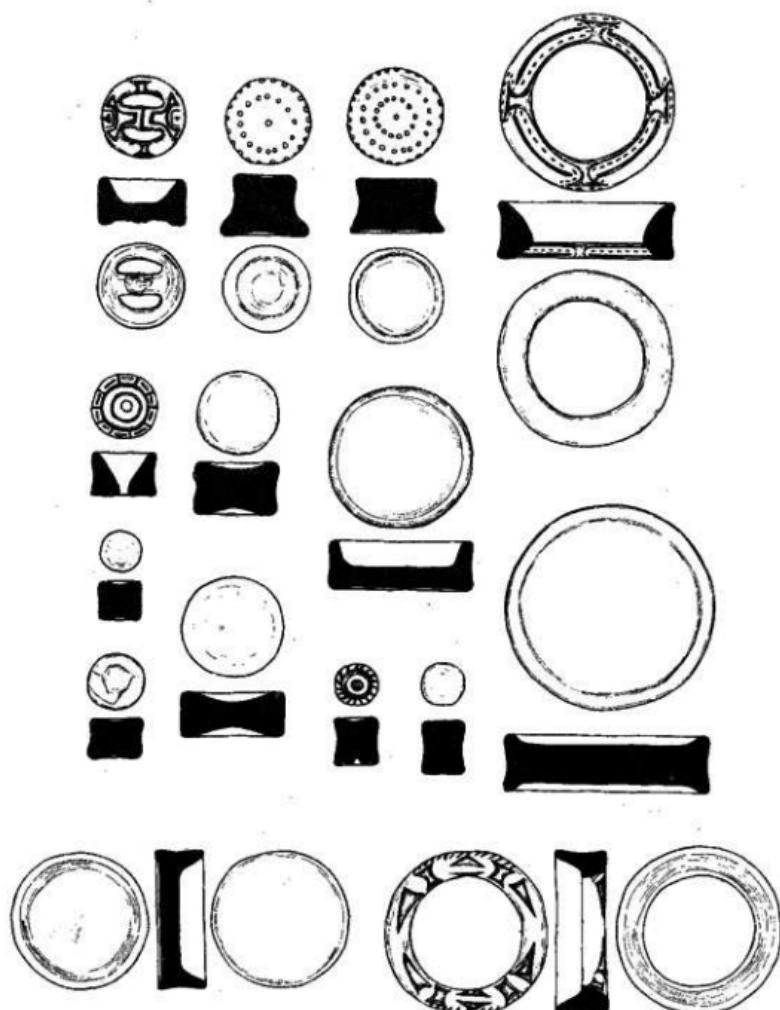
土偶 II

9 cm

第33図 土偶実測図

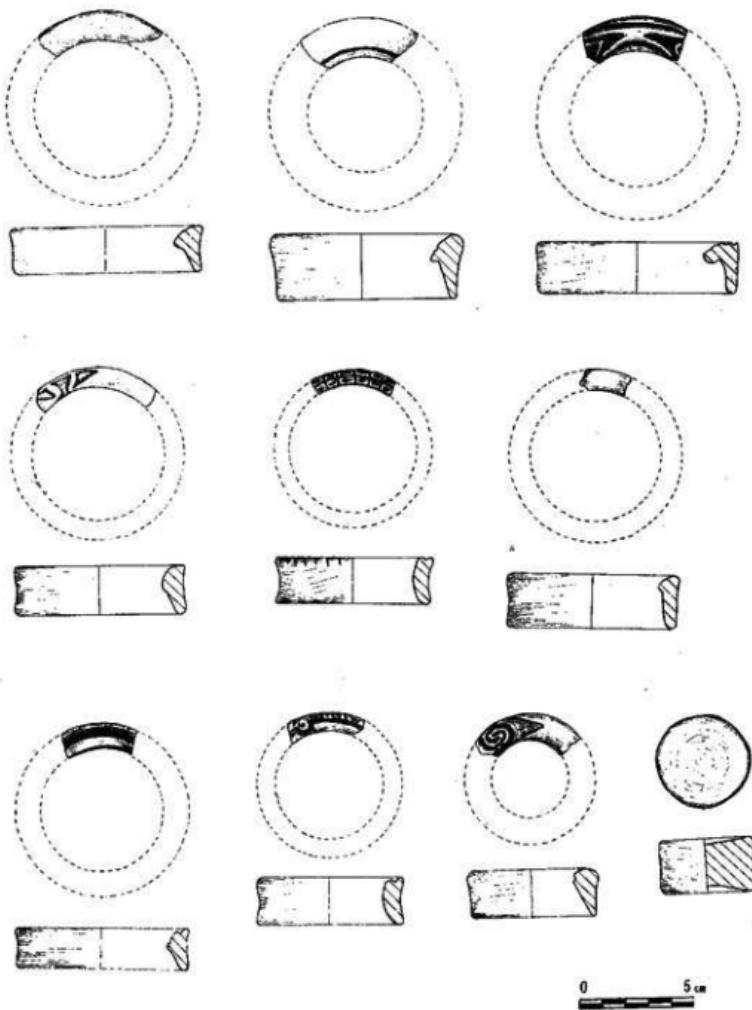


第34図 土製品実測図
(土偶片)

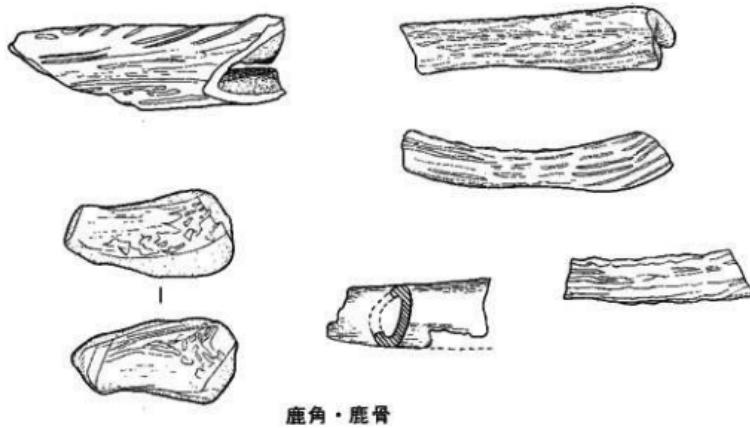


第35図 土製品実測図
(耳 桜)

0 5 cm



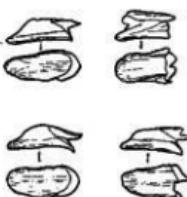
第36図 土製品実測図（耳栓破片）



鹿角・鹿骨



・黒曜石塊中の石器



鹿の歯

第37図 自然遺物

中 溝 遺 跡

昭和49年3月25日印刷

昭和49年3月31日発行

発行者 都留市教育委員会

印刷 佐野印刷
山梨県都留市下谷

